

秋 田 市

秋田臨空港新都市開発関係
埋蔵文化財発掘調査報告書

下堤 G 遺跡
野 烟 遺 跡
湯ノ沢 B 遺跡

1983. 3 秋田市教育委員会

序

秋田臨空港新都市開発事業に係る御所野台地部の埋蔵文化財につきましては、昭和56年度から対処し、本年度もまた五ヶ所の遺跡発掘調査を実施いたしました。今回の調査においても先土器時代から平安時代の人々の生活跡を確認し、多くの貴重な遺物が出土しました。

調査の実施にあたっては県、関係機関の指導援助をはじめ、地元関係者、土地所有者等多くの方々の積極的なご協力をいただき深く感謝申しあげる次第です。

本報告書が文化財保護のため、さらには研究資料として広く活用されれば幸甚に存じます。

昭和58年3月

秋田市教育委員会

教育長 高 泉 宏 作

例　　言

1. 本報告書は、秋田市四ヶ小屋小阿地字下堤（下堤G遺跡）、上北手御所野字野畠（野畠遺跡）、四ヶ小屋末戸松本字湯ノ沢（湯ノ沢B遺跡）に所在する各遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告は、調査員、石郷岡誠一、高橋忠彦、調査補佐員、安田忠市、鈴木　功の協力を得て菅原俊行が編集したものである。
3. 石質の鑑定は、秋田県立博物館の渡辺　辰氏によるものである。
4. 本報告書の執筆は、下堤G遺跡—安田忠市、野畠遺跡—石郷岡誠一、湯ノ沢B遺跡—高橋忠彦が担当し、菅原が訂正、加筆した。下堤G遺跡（先土器時代）と前記以外は菅原俊行が担当した。
5. 発掘調査、整理作業については下記の各氏より指導、助言を賜った。
菊地強一、工藤雅樹、小林達雄、宮澤泰時、藤沼邦彦
6. 整理作業は下記の人々の協力を得た。
相場　修、五十嵐芳郎、石川恵美子、伊藤茂子、大友幸子、佐々木清子、鈴木徳行、三浦千枝子、三浦洋子、渡部キヨ
7. 発掘調査による出土遺物、実測図、写真、その他の記録は秋田市教育委員会が保管する。

目 次

序	
例言	
調査に至るまでの経過	1
調査体制	1
調査の方法と経過	2
遺跡の位置と地形・地質	8
下堤G遺跡	11
遺跡の概観	14
遺構と遺物	14
まとめ	40
野畠遺跡	51
遺跡の概観	54
遺構と遺物	54
まとめ	71
湯ノ沢B遺跡	75
遺跡の概観	79
遺構と遺物	79
まとめ	131
下堤G遺跡（先土器時代）発掘調査概報	137
遺跡の概観	138
層位	138
出土遺物	139
遺構	156
まとめ	160





御所野台地南より秋田市街地を臨む



下堀G遺跡（北→）



野畠遺跡（南→）



湯ノ沢B遺跡（東→）

調査の概要

調査に至るまでの経過

秋田市南東部地域は、昭和56年6月の秋田空港の開港、東北横断自動車道秋田線秋田インターチェンジ開設予定等、空陸両面の交通の要衝に位置する所である。このような状況の中で南東部地域における御所野地区については特に広大な台地であることから、いち早く開発可能性等についての各調査が実施され、県市総合計画においても産業、住宅団地が一体となった総合的ニュータウン—臨空港新都市として具体的に位置づけられた。

昭和56年度には開発計画地域内の西部工業団地造成に先立ち、下堤D遺跡の発掘調査を行なっている。昭和55年に御所野台地全体の分布調査を実施し、約30ヵ所の遺物散布地を確認していたが、昭和57年度は今後の開発計画に対処するため分布調査を基に遺跡の範囲確認調査を実施することにし、その結果、台地上に24ヵ所の遺跡を確認したのである。（第3図、御所野台地部範囲確認遺跡一覧表）

この結果に基づき協議を重ね、引き続き年度別に計画的な発掘調査をすることになり、昭和57年度は下堤G遺跡、野畠遺跡、湯ノ沢B遺跡、坂ノ上C、D遺跡を調査したのである。

調査体制

調査期間 昭和57年5月6日～7月14日（範囲確認調査）

昭和57年8月2日～12月15日（発掘調査及び伐採作業）

調査主体者 （財團法人）秋田県土地開発公社

調査担当者 秋山市・秋田市教育委員会

調査員 菅原厚行、石郷岡誠一（秋田市教育委員会社会教育課）

高橋忠彦、小林 克（秋田県埋蔵文化財センター）

調査補佐員 安田忠市（秋田考古学协会会员）、鈴木 功

調査協力員 五十嵐芳郎（秋田考古学协会会员）、武藤康弘（国学院大学）、本間 宏（明治大学）、石川恵美子（筑波大学）、塙田 誠、鈴木 浩（秋田大学）、相場 修（明治大学）、田代博秀（国学院大学）

調査作業員 鈴木銀一、鈴木長治、鈴木茂治、鈴木徳行、三浦竹治、三浦 肇、三浦吉司、三浦吉男、三浦正二、秋本与次郎、秋本佐市、岩崎岩五郎、水野金光、三浦三治、鈴木力雄、加賀谷新之助、渡部太郎、堀井鉄五郎、鈴木銀三郎、高橋貞義、渡部吉春、加賀谷金一郎、尾形市雄、安藤金四郎、後藤善一郎、渡部金次郎、佐々木定吉、渡辺圭太郎、堀野兼雄、渡辺太市、児玉太郎、斎藤孝文、島崎康樹、加藤熊雄、鈴木慶子、伊藤茂子、伊藤ヒメ子、三浦タキ、三浦千枝子、三浦トミエ、三浦初枝、堀井ヤス、橋本栄子、佐々木フミ、大友幸子、加藤満子、熊谷文子、相場ミツエ、堀

岸キヨエ、鈴木ウメノ、鈴木トミ、工藤キクエ、堀井征子、三浦シゲ、宮田トキ子、
三浦ナツ、鈴木フヤ、高島綾子、佐々木謙子、渡部キネ子、佐々木清子、渡部キヨ、
嵯峨信枝、堀井シゲ、稻垣テル子、尾形ミツエ、杉沢チエ子、鈴木貞子、杉沢フミ、
佐々木シマ、渡辺ミネ、渡部セツ、佐々木ヨシ、渡部アイ子、高橋ヨシ子、堀野京
子、矢倉アキ、渡辺ミサ、加賀谷ヒデ

事務員 佐藤誠子、三浦洋子

調査の方法と経過

調査区は各遺跡ごとに原点を任意に決め、東西南北（磁北）に基準線を作り、大グリッド（40m×40m）、その中に小グリッド（4m×4m）を設定し、東西（X軸）に数字、南北（Y軸）にアルファベットを配し、その組み合せを作り、遺跡番号、大グリッド番号、小グリッドの順に呼称することとした。

発掘調査は下堤G遺跡（%～%）、野畠遺跡（%～%）、湯ノ沢B遺跡（%～%）、坂ノ上C、D遺跡（%～%）の工程で行なったが、各遺跡とも山林原野であり、伐採作業から始めなければならずバッカホーを使っても、表土剥ぎは木根のため、かなり苦労した。下堤G遺跡、野畠遺跡、湯ノ沢B遺跡は図らずも縄文時代前期末～中期初頭、中期末葉の同時期の集落であったが、坂ノ上C、D遺跡については範囲確認調査の際、広範囲に遺物が出たし、期待された遺跡であったが発掘の結果遺物は包含層に散在するが両遺跡に遺構は確認できなかったもので出土した遺物（第1図、第2図）を簡単に記述するにとどめる。今回の調査は範囲確認も含めて天候に恵まれたので、来年度発掘調査予定地の伐採も一部実施した。

坂ノ上C・D遺跡出土遺物

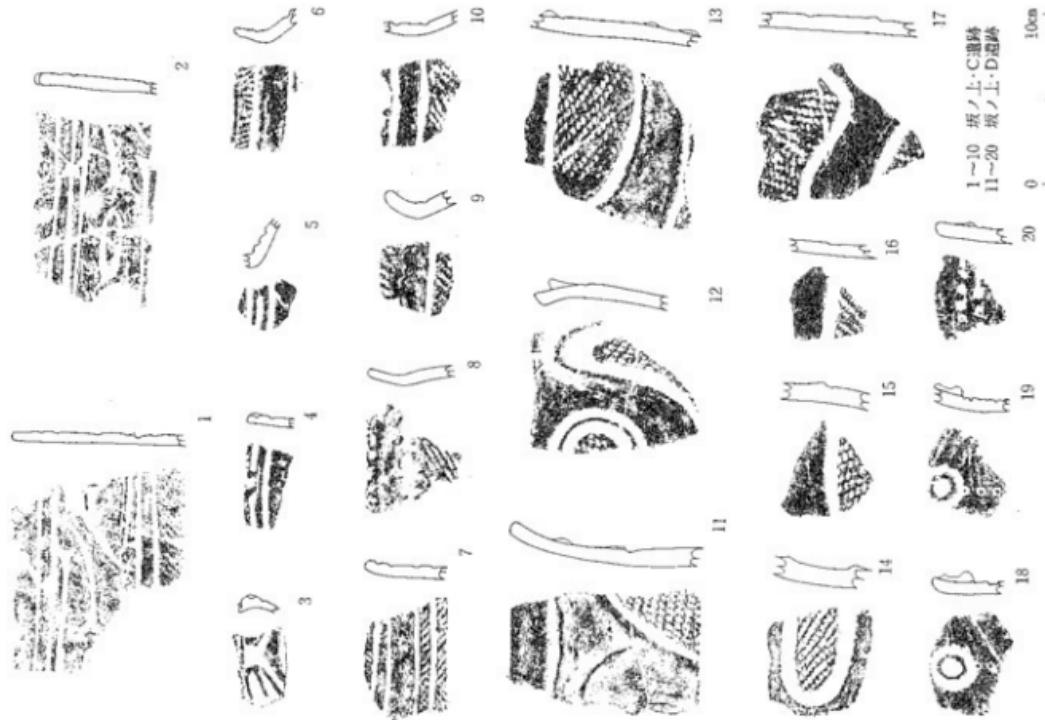
土器（第1図1～20、第2図21）

1～10・21は坂ノ上C遺跡出土で、主に沈線で文様を施すものである。1・2は変形波状口縁をなす深鉢形土器である。口縁部は沈線による平行・楕円形・孤状などの文様を施す。3～5は丁字文・変形丁字文で、3・4には2個1対の縮が付く。6～10は平行沈線文の施されるもので、沈線間を磨消すものとそうでないもの、口縁部が外反するものとしないものがある。21は平縁口線の鉢形土器で、口縁部内外面に1条の沈線が巡り、地文はしR単節縄文（横位回転）である。全体に良く磨かれている。以上、縄文時代晩期から弥生時代にかけての土器と考えられる。11～20は坂ノ上D遺跡出土で、曲線的な磨消帯が施されるものである。磨消帯は周辺より盛り上がるもの、隆起線と沈線で区画されるものが多い。18・19はボタン状の貼り付けが施され、その下に刺突が重下する。20は隆帯の上・下に列点文が巡る。以上、縄文時代中期末葉の大木10式土器と考えられる。

土製品（第2図22） 土器片を加工して作った円盤状土製品で、坂ノ上D遺跡出土である。

石器（第2図23～34） 24～27・29～32は坂ノ上C遺跡出土、23・28・33・34は坂ノ上D遺跡出土である。石鏃（第2図23）無茎鏃で、硬質頁岩製である。 石匙（第2図24）横形石匙で、ツマ

ミ部と刃部の一部を欠く。硬質頁岩製である。ヘラ状石器（第2図25）前面加工で、橢形をなす。硬質頁岩製である。磨製石斧（第2図26～28）完形品ではなく、28は断根が著しい。擦灰岩製である。石錐（第2図29）両端を打ち欠いたものである。擦灰岩製である。磨石（第2図30～33）安山岩製で磨滅が著しい。石皿状石器（第2図34）扁平なもので良く磨滅し、中央部が凹む安山岩製である。

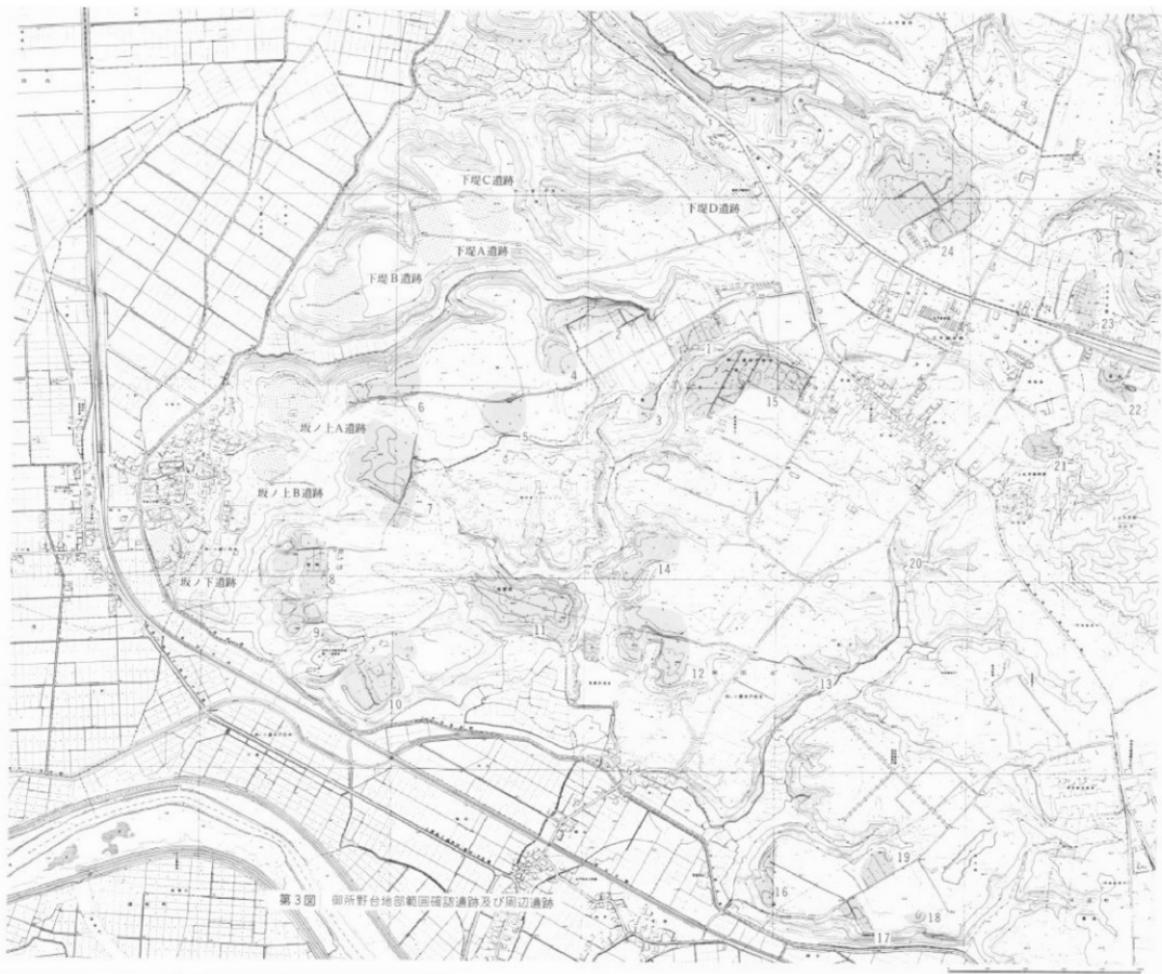


第1図 坂の上C・D遺跡出土遺物



21-24-27-29-32 板ノ上C道跡
22-23-28-33-34 板ノ上D道跡

第2図 板ノ上C・D道跡出土遺物



第3図 御所野台地部軽固確認道路及び周辺道路

御所野台地部 範囲確認遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所 在 地	時 代	面積m ²	現 状
1	下堤 E	秋田市四ノ小屋小阿地字下堤	縄文	5,625	畠
2	下堤 F	タタタ	タ	14,375	タ
3	下堤 G	タタタ	先土器・縄文(中)	5,000	山林原野
4	坂ノ上 C	タタタ四ノ小屋小阿地字坂ノ上	縄文	6,000	タ
5	坂ノ上 D	タタタ	タ	14,060	タ
6	坂ノ上 E	タタタ	タ	15,000	タ
7	坂ノ上 F	タタタ	タ	37,810	タ
8	狸崎 A	タタタ四ノ小屋小阿地字狸崎	縄文(晚)	13,750	畠・山林原野
9	狸崎 B	タタタ	縄文	11,250	原野
10	地蔵田 A	タタタ四ノ小屋末戸松本字地蔵田	先土器・縄文・平安	30,000	畠
11	地蔵田 B	タタタ	縄文(中晩)・弥生	25,000	山林原野
12	湯ノ沢 A	タタタ四ノ小屋末戸松本字湯ノ沢	縄文	21,555	タ
13	湯ノ沢 B	タタタ	縄文(前・中)	5,000	タ
14	湯ノ沢 C	タタタ	縄文(中晩)・弥生	11,565	タ
15	湯ノ沢 D	タタタ	縄文(中)	35,000	畠
16	湯ノ沢 E	タタタ	縄文	7,500	タ
17	湯ノ沢 F	タタタ	縄文・土師須恵	5,310	タ
18	湯ノ沢 G	タタタ	縄文(後)	1,300	原野
19	湯ノ沢 H	タタタ	縄文	5,940	畠
20	野 畑	タタタ上北手御所野字野畠	縄文(中)	1,875	山林
21	野 形	タタタ上北手御所野字野形	土師・須恵	5,940	山林原野
22	深 田 沢	タタタ上北手古野字深田沢	縄文・平安	6,875	畠
23	台	タタタ上北手古野字台	タ	8,440	タ
24	地 方	タタタ上北手廣田字堤ノ沢	縄文(晚)	54,670	畠・原野

遺跡の位置と地形・地質

秋田市街から国道13号線を南下し、仁井田、横山を過ぎ坂を登ると標高約40m前後の広大な台地が開ける。これは奥羽本線四ツ小畠駅方面からもよく見える平坦な台地であり、臨空港新都市開発計画地域である。

下堤G遺跡

前述の坂を登ると三叉路があり、旧道に入り約450mほど行くと西側に羽後銀行の野球場がある。そこを西へ約500m、畑の中を進み南に張り出した舌状台地が下堤G遺跡である。

野畠遺跡・湯ノ沢B遺跡

三叉路から旧道に入り約1km進み、御所野地区の南端部を西側に約200m行った南に張り出した舌状台地が野畠遺跡である。さらに約500m行き、東に約150mの南面した台地が湯ノ沢B遺跡である。

確認された24カ所の遺跡の存在する地形は大別して和田丘陵と末戸台台地に分けられる。和田丘陵は平坦面をあまり持たない。しかし、定高性を持った標高60～150mのかなり開析を受けた老年期地形を示し、地質は第3系鮮新統に属する青色砂質シルト岩(笠岡層)と青灰色塊状泥岩(天徳寺層)、それに中新統に属する暗灰色泥岩(船川層)などからなっている。末戸台台地は標高25～50m強で¹⁾その表面は大変平坦である。この台地は和田丘陵と接して数段の段丘を識別できる。これらは内藤の区分からすると、上位から標高45～50m強の椿台段丘、標高40m強の上野台段丘Ⅰ、標高35m強の上野台段丘Ⅱ、標高25m強の宝竜崎段丘の4段に分けられる。(第4図)

椿台段丘

岩見川右岸末戸台台地では45～50m強の標高をもつ、いわゆる椿台面をその堆積面とする椿台層が厚い疊(最大径10cm前後)、砂、粘土の互層で構成されている。ただ基底高さはわからない。岩相は最上部に1～2mの褐色の粘土質火山灰層があり、次に疊・砂・粘土の互層で、砂疊の部分でしばしばクロス・ラミナ(斜交葉理)がみられ、砂上あるいはシルトは水平な細かい層理をなすことが多い。層厚をみると、疊層はうすく、砂・粘土層が厚い。その下部は第3系の泥岩(船川層)や砂質シルト(笠岡層)となっている。

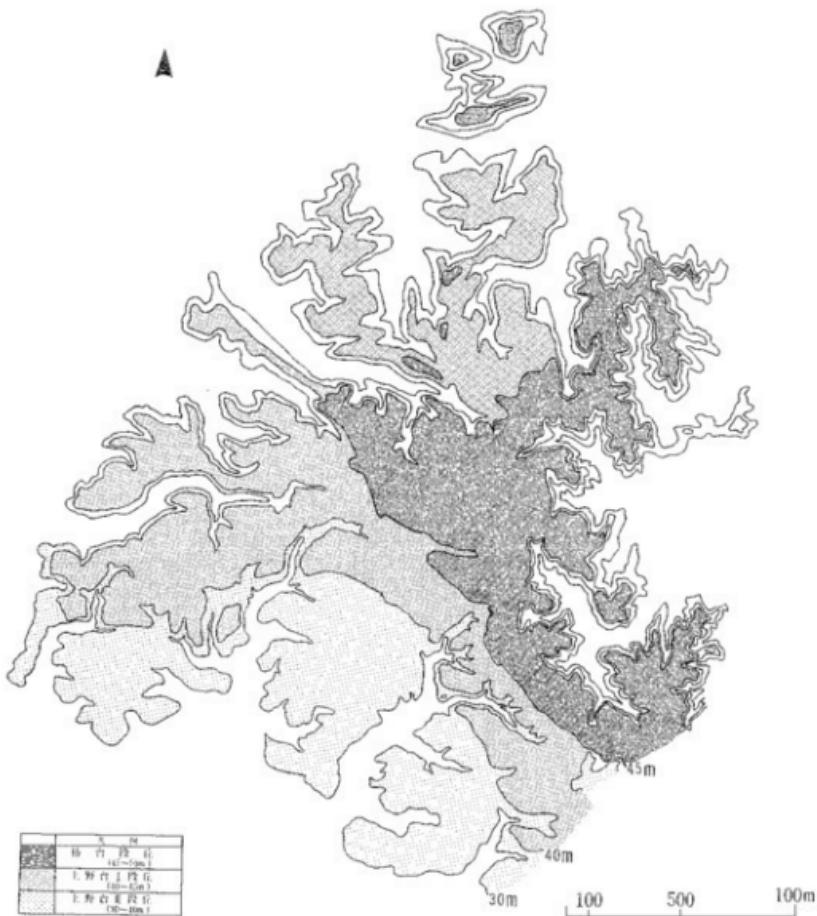
上野台段丘Ⅰ

末戸台台地で椿台段丘の南側に標高40m強についている段丘が上野台段丘Ⅰと呼ばれている。表層の1～2mの粘土質火山灰層を除くと、段丘堆積物は最大径20～30cmの疊を含む疊層であり、厚さは5m程度でその下部は第3系となっている。下堤G遺跡はこの上野台段丘Ⅰに位置する。

上野台段丘Ⅱ

末戸台台地では上野台段丘Ⅰとの比高が5m強である。段丘堆積物の岩相は上野台段丘Ⅰとはほぼ同様で、層厚は5m前後である。内藤によれば厚い疊層の下部は椿台層に当るとしている。野畠遺跡、湯ノ沢B遺跡はこの上野台段丘Ⅱに位置する。段丘堆積物の特徴は上野台Ⅰ・Ⅱ面では最大径30cm前後の重圓疊を主体とするほぼ一様な疊層をもち、河川堆積物で厚さも加味すると岩見川など

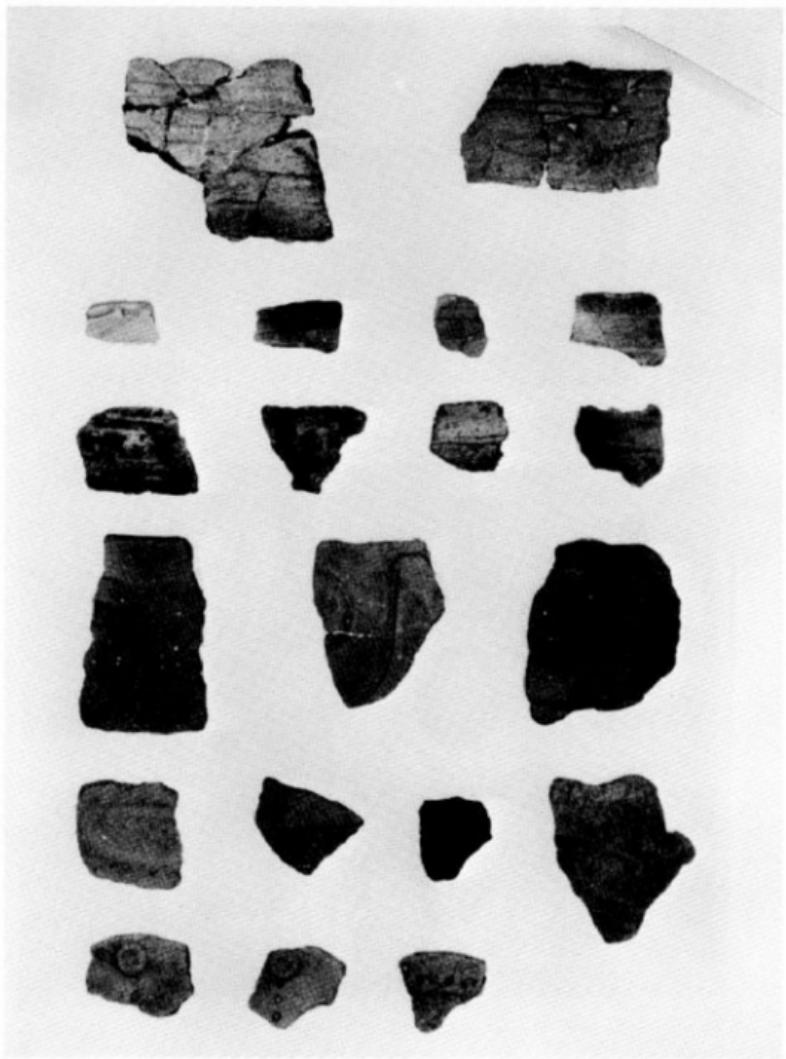
による河成の浸食段丘面と考えられる。樋台、上野台Ⅰ・Ⅱ面の各面をおおっている層厚1~2mのシルト分を含んだ粘土質火山灰層は、男鹿半島の寒風山が起源と一応考えられている。この粘土質火山灰層の表面細粒物質の風化状態をみていくと、樋台、上野台Ⅰ・Ⅱ面では黒色土の下の細粒物質のうち、上部50~100cmが明褐色を呈し、下部は灰色で境は漸移する。また、土壤断面を見ると樋台、上野台Ⅰ・Ⅱ面をおおう土壤は、いわゆる高岡2統に属していると考えられ、比較的大きい円礫を混入していて、黒色土層を厚く堆積させている。この層中には火山ガラスを混入しており、火山灰が関係しているものと推定される。



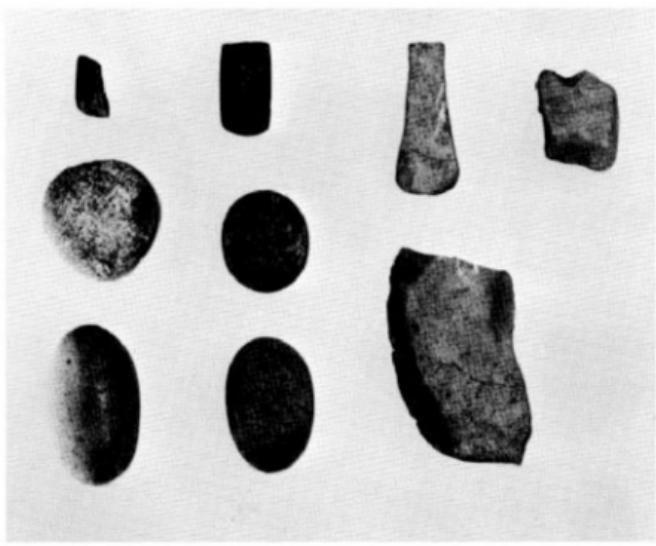
第4図 段丘

参考文献

- 1) 内藤博夫 「秋田県岩見川流域およびその周辺の段丘について」
第4紀研究第4卷第1号 1965年
- 2) 経済企画庁土地分類企画調査「秋田」1966年
秋田県教育委員会「八郎潟の研究」1965年
- 村山 勝 「火山活動と地形」大明堂
- 林 宏 「秋田県男鹿半島一の日島周辺の火山拠出物について」地質学雑誌第61卷第717号
1955年

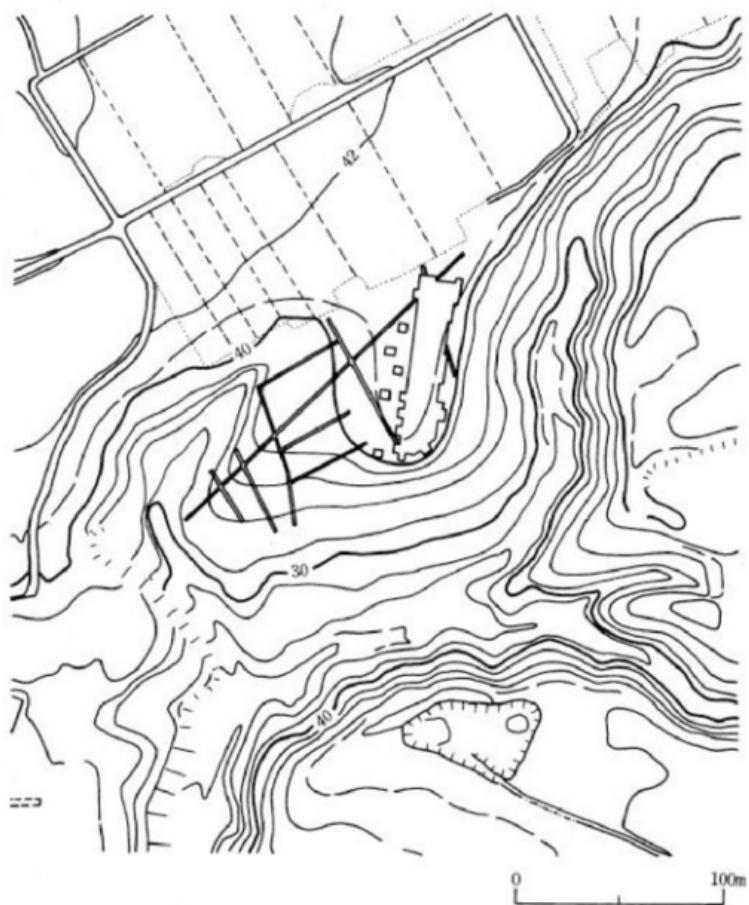


坂ノ上C・D遺跡出土土器

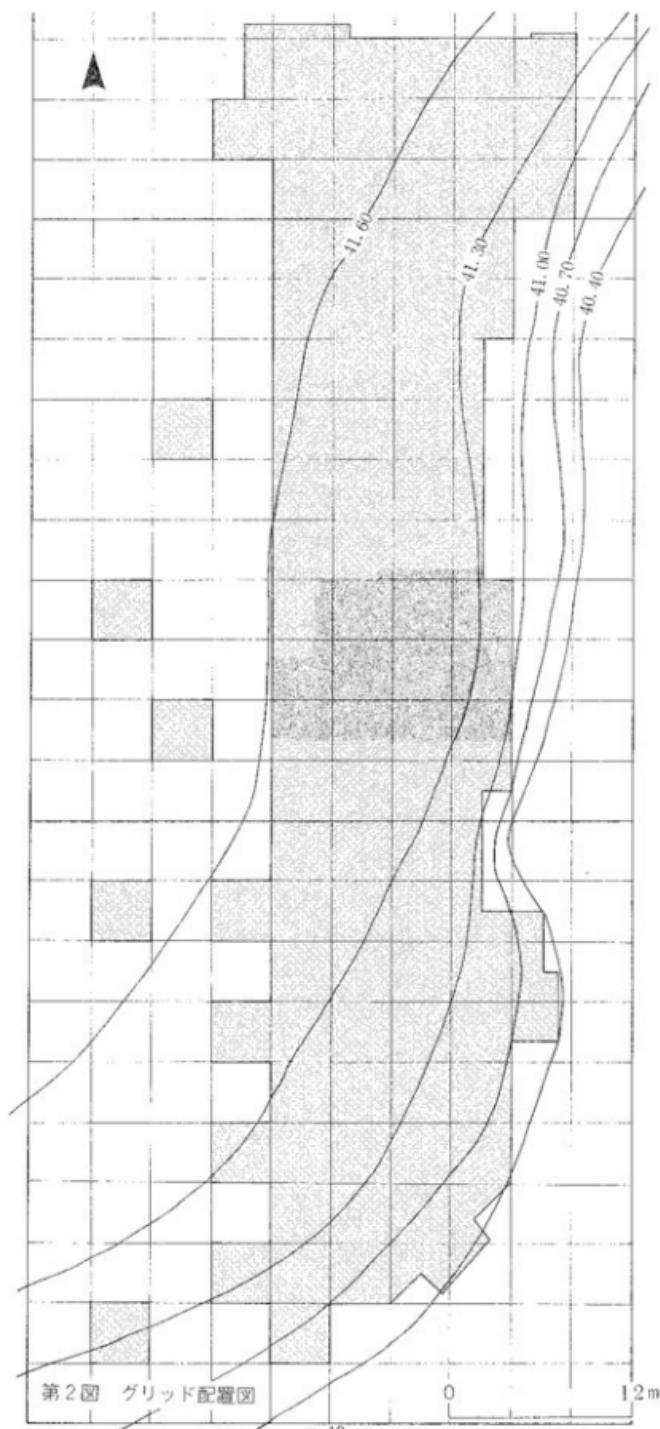


坂ノ上C・D遺跡出土土器・石器

下堤 G 遺跡



第1図 遺跡周辺の地形



遺跡の概観

南に張り出した舌状台地（約10,000m²）の東に位置する。遺跡は先土器時代との複合であり、住居跡は縄文時代前期末葉から中期初頭にかけてのものが1軒、中期末葉のものが5軒検出された。縄文時代前期（末）から中期（末）の遺跡は、北西約800mに下堤A、B遺跡、北東約600mに下堤D遺跡、西約900mに坂ノ上A遺跡などがある。

遺構と遺物

1号住居跡（第3図）

調査区南側の縁辺部で、2号住居跡の東側に位置する。

プランは径4.3mのほぼ円形を呈する。埋土の状態は、黒色土、黒褐色土上の堆積で炭化物が混入する。確認面からの深さは25cm程で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。しかし、地形が東側の沢へ向って緩く傾斜する為に、東側の壁高は低い。ピットは比較的浅く柱穴ははっきりしない。

炉は、土器埋設部と堀り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器胴部を倒立させて埋設してある。埋設土器と周辺の土はかなり焼けている。堀り込みは梢円形で鍋底状を呈し、焼土、炭化物が入る。また、東側に一段浅く溝状の堀り込みがあり壁に接する。これらは炉の長軸線上にある。

床はほぼ平坦である。

出土遺物

土器（第4図1～3、第16図13～25）

1・3は埋土出土、2は伊埋設土器である。2は深鉢形土器の上、下部を欠く胴部で、R L 単節斜縄文（継位回転）の施文である。3は平縁口縁の深鉢形土器で底部を欠く。口縁部は無文帯で、胴部には沈線で区画された波状の磨消帶が施される。磨消帶の3つの波の頂部には、沈線で区画され下からの刺突が施され、他の1つの波は大きく頸部まで延びる。地文はL R 単節斜縄文（継位回転）である。他は曲線的な磨消縄文帯の施されるものと並んで、列点文を施すものもある。

土製品（第21図1～3）

全て埋土からの出土で、3点とも四角形を呈する。

石器（第22図1～3）

1・2は石鎌、3は打製石斧、他に剣片が数点出土している。

2号住居跡（第5図）

調査区の南側、1号住居跡の西側に位置する。

プランは径3mのほぼ円形を呈する。埋土状態は、ブロック状の明褐色土が混入する褐色土である。確認面からの深さは15cm程で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは深い堀り方のものが数個検出された。

炉は土器埋設炉であるが、堀り方を立ち割った結果、埋設土器の北側が大きく堀り込まれ、またその北側に一段深い堀り込みが確認された。しかし、平面及び土層断面では明確に観察できなかっ

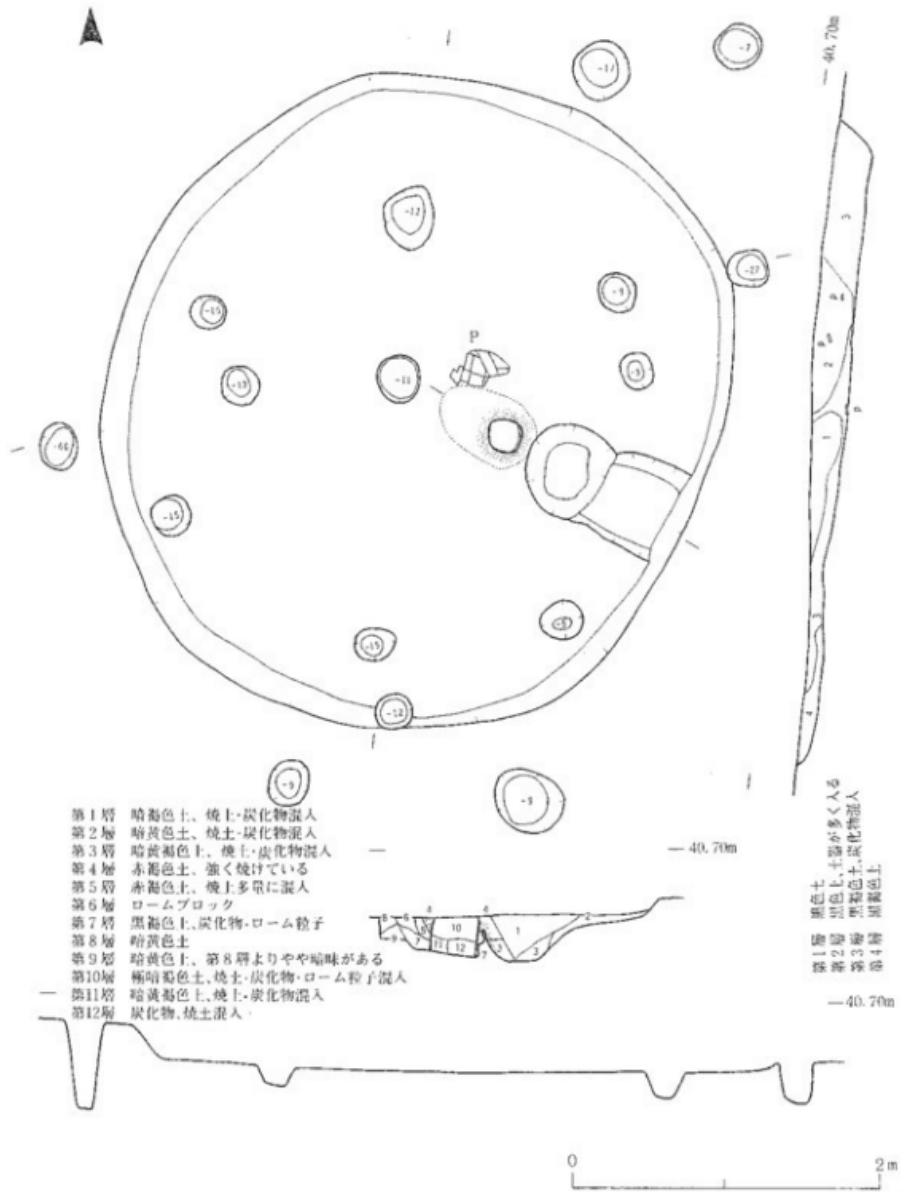


図3-1号住居跡

た。埋設土器は深鉢形土器の口縁部及び底部を欠き、南側にやや傾けて埋設してある。中には炭化物が多量に入り、底面には口縁部破片が数点みられた。また、埋設土器及び周辺の土は良く焼けていた。

床面はほぼ平坦である。

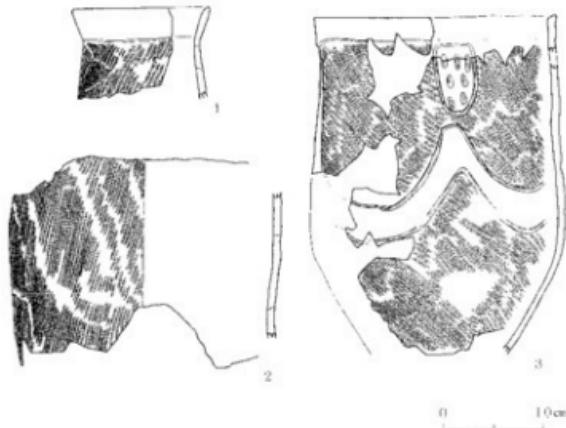
出土遺物

土器（第7図4、第17図26～34）

4は炉埋設土器で、口縁部が外反する深鉢形土器である。口縁部は無文帶で、内面に三日月状の貼り付け文がみられる。胸部は沈線で区画された磨消帯が頸部より垂下し、中程で横走し再び垂下して底部に至る。三単位構成の磨消帯で、中程の接する部分に断面が三角形をなす細長い粘土を貼り付けている。地文はL R 単節斜縞文（縦位回転）である。他は山形口縁で曲線的磨消帯を作るものや、口縁部に貼り付け文の施されるものがある。

土製品（第21図4） 埋土出土の三角形土製品である。

石器（第22図4、第27図22） 4は石鏃、他に剥片が数点出土している。

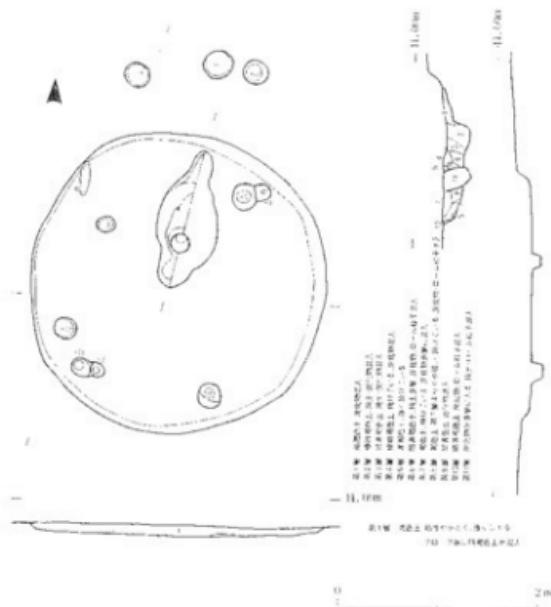


第4図 1号住居跡出土遺物

3号住居跡（第6図）

調査区のはば中央東側に位置する。

プランは径3.1mの梢円形を呈する。埋土の状態は、黒色土、黒褐色土の堆積である。確認面からの深さは20cm程度で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは浅く柱穴ははっきりしない。



第5図 2号住居跡

がは、土器埋設部と堀り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の上部及び底部を欠いて埋設し、土器と周辺の土は良く焼けている。また炉は作り替えており、埋設土器の南側に古い埋設土器と考えられる破片がみられ、周辺の土が焼けた痕跡を確認した。堀り込みは梢円形で鍋底状を呈し、埋土には焼土、炭化物及び土器片が数点入っていた。この堀り込みの北側に一段浅い溝状の堀り込みがあり壁に接する。

床面はほぼ平坦である。

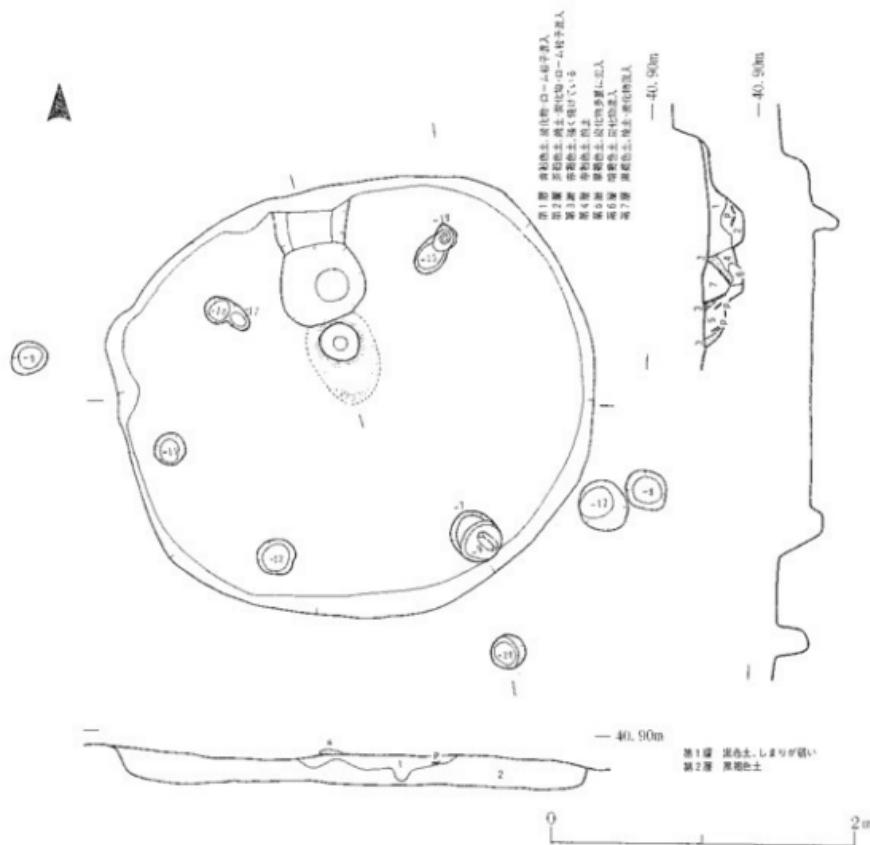
出土遺物

土器（第7図5・6、第18図35～38）

5は炉埋設土器、6は炉堀り込みからの出土である。5は胴上部及び底部を欠く深鉢形土器である。沈線で区画した曲線的な磨消帯が施される。地文はR L 単節斜縫文（縦位回転）である。6は平縁口縁の深鉢形土器である。口縁部は無文帯で、地文はL R 単節斜縫文（縦位回転）である。他は口縁部無文帯や胴部に曲線的な磨消帯を作るもの、地文に撚糸文を施すものである。

石器

埋土から鉋片が2点出土している。



第6図 3号住居跡

4号住居跡（第8図）

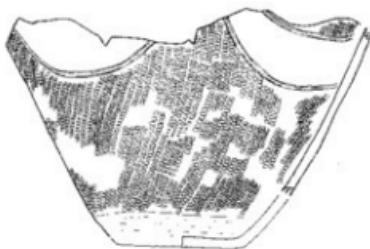
調査区のほぼ中央部で検出し、遺跡範囲確認調査トレンチで一部確認されていた住居跡である。

プランは長軸6.5m、短軸5.3mの楕円形を呈する。埋土の状態は、黒色土、赤褐色土（焼土）、褐色土・明褐色土が主に堆積する。確認面からの深さは45cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは深い堀り方のもの6個と浅い堀り方のもの数個が検出された。柱穴は深い堀り方の4個または5個と考えられる。

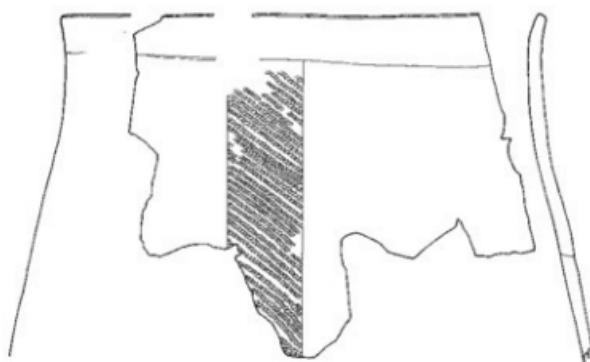
かほは、住居跡中央部に土器埋設炉と、中央部南東側に土器埋設部と堀り込みを検出した。これらは、一直線上には並ばない。中央部の土器埋設炉の土器は、口唇部と底部を欠いた深鉢形土器である。埋設土器及び周辺の土がかなり焼け、土器の中に礫が一個入っていた。南東側の土器埋設部の土器は、深鉢形土器の胴部のみで、北側にやや傾けて埋設してある。埋設土器及び周辺の土はかな



4



5



6

4 2号住居跡
5・6 3号住居跡



第7図 2・3号住居跡出土遺物

り焼け、中には炭化物が多量に入っていた。また、炉は作り替えられており、埋設土器の北側に掘り方とかなり焼けた痕跡を確認した。堀り込みは梢円形で鍋底状を呈し、埋下部には焼土が多量に、また深鉢形土器の底部と礫が入っていた。

床面はほぼ平坦である。

出土遺物

土器（第9図7～10、第17図39～49、第18図50～72）

7は住居跡中央部の炉埋設土器、10は南東側の埋設土器、9は堀り込み、8は埋土からの出土である。7は口唇部と底部を欠く深鉢形土器である。口縁部に撲糸文を並行及びG状に施し、頸部には單軸絡条体圧痕文が施される。また8字状に粘土を貼り付け、胴部地文と同一の繩文が施される。胴部はL R 単節斜繩文（縱位回転）で、内面はヘラ状工具により良く研磨されている。8は口縁部がすぼむ器形で、無文帯が広く沈線が巡る。地文はR L 単節斜繩文（縱位回転）である。9は撲糸文の施される深鉢形土器である。9は平縁口縁で胴部に影りがあり、胴下部を欠く深鉢形土器である。10は無文帯で、胴部は沈線により区画された丁字状及び波状の磨消帶が連絡している。磨消帶は周辺より盛り上がり、棒またはヘラ状工具で良く研磨されている。五単位構成で、頸部と胴部には沈線で区画された中に刺突が施される。地文はL R 単節斜繩文（縱位回転）である。他は曲線的な磨消帶及び口縁部無文帯のものや、半截竹管状工具内面による半隆起線文を施すもの、撲糸文を施すものなどが出土している。

石器（第22図5～9）

5・6が石匙、7が槍先状石器、8がヘラ状石器、9が磨製石斧で、他に剣片が多数出土している。

5号住居跡（第10図）

調査区北側で検出した。2号土塙及び3号土塙と重複し、2号土塙に切られているが、3号土塙との関係は不明である。

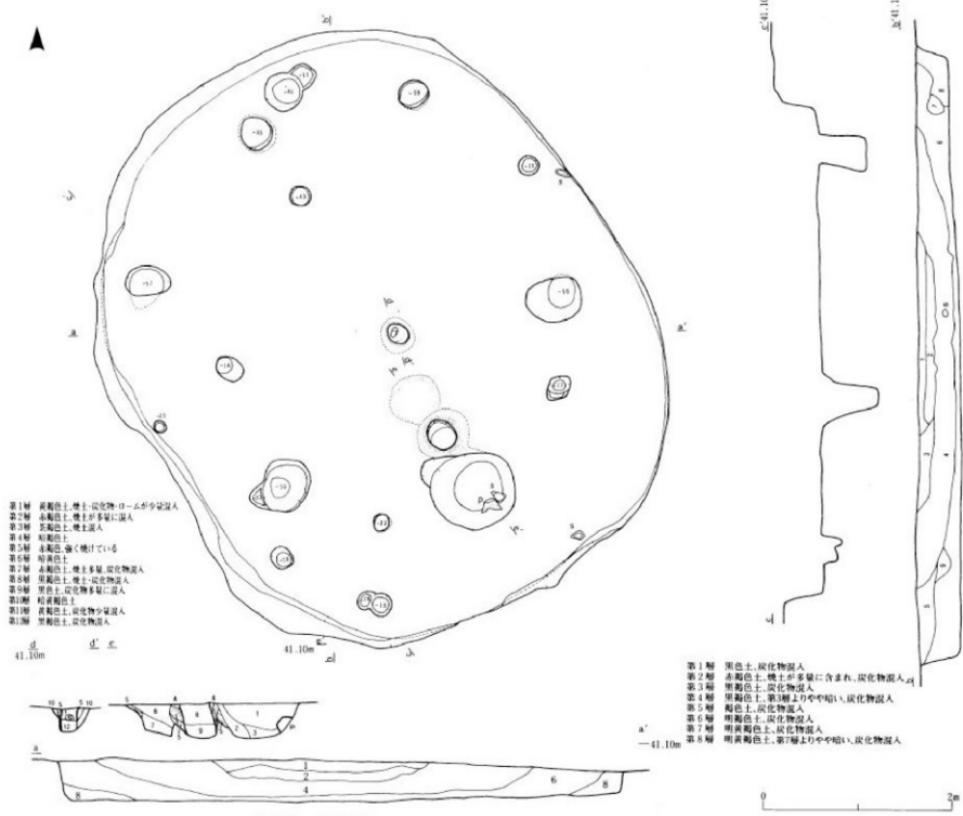
プランは推定長軸5.0m、短軸3.5mの長梢円形を呈する。東側に浅い溝状の堀り込みが検出された。埋土の状態は、ロームブロックの混入する暗褐色土、暗黄色土が主に堆積する。確認面からの深さは10cm程度で、壁はゆるく立ち上がり、確認できなかった部分もある。ビットは不規則な状態で検出された。炉は地床がで、南側に構築されている。

床面はほぼ平坦である。

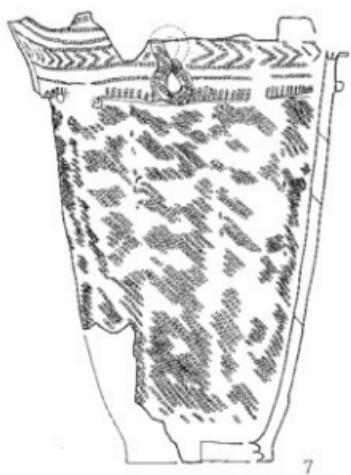
出土遺物

土器（第12図11、第18図73～75、第19図76～99）

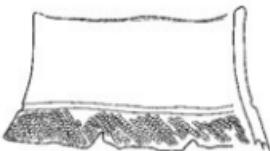
11は埋土出土である。頸部が外反して口縁部が内湾し、胴部がやや膨らむ鉢形土器である。山形



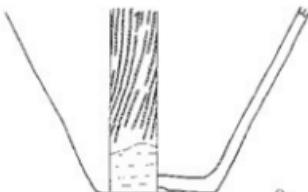
第8回 4号住居跡



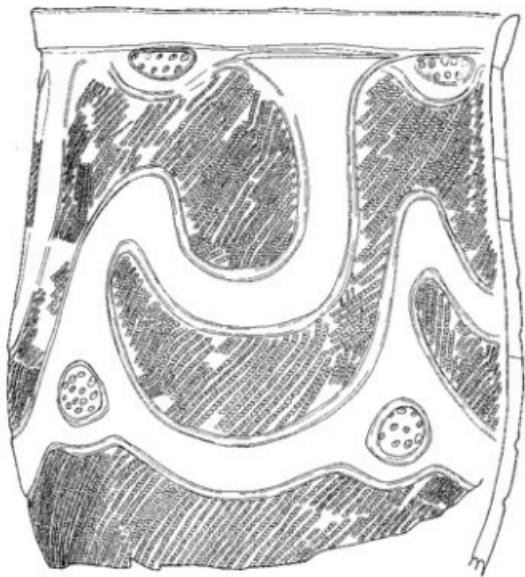
7



8



9



10

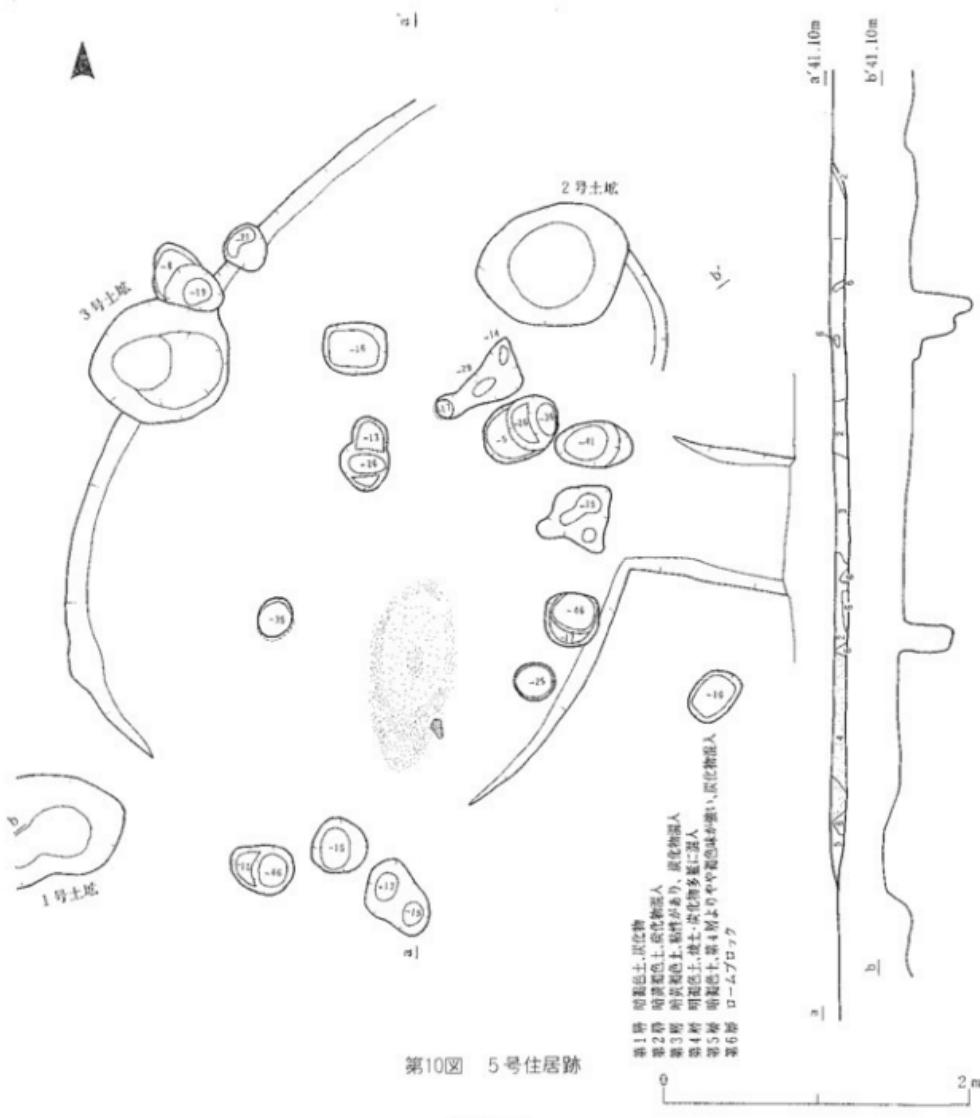
0 10 cm

第9図 4号住居跡出土遺物

口縁で、頂部より隆帯が垂下し強く押し付けた燃糸圧痕文が施される。口唇部にも刻目状に施文される。地文はL R 単節斜繩文（継位回転）で、全体に磨滅が著しい。他は半截竹管状工具内面による半隆起線文、口縁部文様帶に粘土絆を貼り付けて燃糸圧痕文を施すものが出土している。

土製品（第21図5） 埋土出土で縦面を表わす。

石器（第22図10～15） 10～12は石鏃、13は搔器、14は槍先状石器、15は異形石器である。



第10図 5号住居跡

6号住居跡（第11図）

調査区南側、4号土塙の南側に位置する。

プランは径3.0mの楕円形を呈する。埋土の状態は、ローム粒子の混入する暗褐色土、黄褐色土が主に堆積する。確認面からの深さは15cm程度で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは壁際に4カ所検出され、生柱穴と考えられる。

炉は、上器埋設部と堀り込みからなる。土器埋設部の上器は、深鉢形土器の胴部を利用し倒立させ西側にやや傾けて埋設してある。埋設土器及び周辺の土はかなり焼けている。堀り込みは楕円形で鍋底状を呈する。塙口部に3個の礫が据えられていた。また、炉の周辺や埋土から礫が出土している。

床面はほぼ平坦である。

出土遺物

土器（第12図12、第20図100～102）

12は炉埋設土器で、深鉢形土器の胴部である。沈線で区画された横S字状またはJ字状の磨消帯が施される。磨消帯は周辺より盛り上がり、ヘラ状工具で良く研磨されている。地文はL R 単節繩文（継位回転）である。他は曲線的な磨消繩文帯を施すものである。

石器（第24図22） 22は床面出土の磨石で、両面が磨滅している。

土 塙

1号土塙（第13図）

調査区北側で、5号住居跡の南西側に位置する、深さ20cmで楕円形を呈する。出土遺物はない。

2号土塙（第13図）

調査区北側で、5号住居跡を切っている。長軸1m、短軸0.8m、深さ40cmで楕円形を呈する。埋土上部に扁平な石が確認され、暗褐色土、黄褐色土、黒褐色土が堆積している。石器と多量の剥片・碎片が出土し、石器製作後、一括投棄されたものと考えられる。

出土遺物

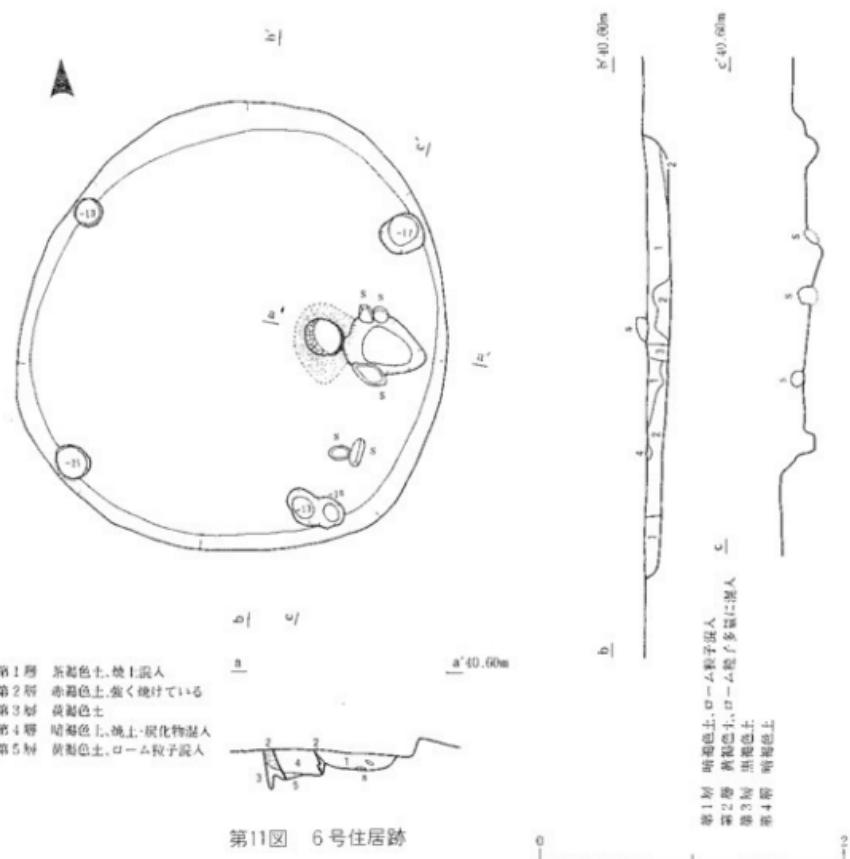
石器（第23図16～21） 16～20は石鎌、21は石錐である。

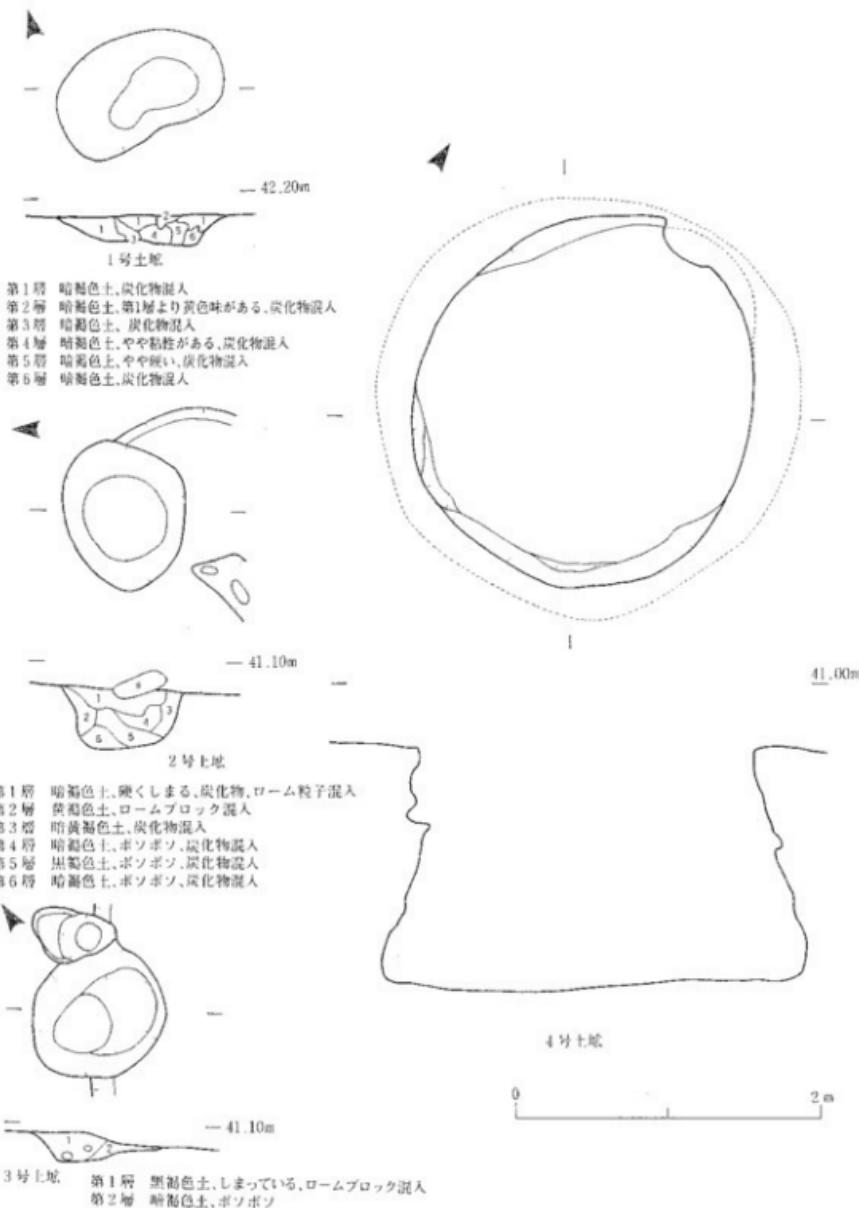
3号土塙（第13図）

調査区北側で、5号住居跡の西壁に重複して検出されたが、新旧関係については不明である。径80cm、深さ20cmで楕円形を呈する。出土遺物はない。

4号土塙（第13図）

調査区中央部で検出された袋状の土塙である。塙口部径2.2m・塙底部径2.7m・深さ1.6mではほぼ円形を呈し、礫層を堀り込んでいる。埋土下部には崩落土が多量に堆積しており、塙口部及び頸部が狭くなる。いわゆるフラスコ状をなしていたと推定される。西側は風倒木により擾乱を受けている。底面はほぼ平坦である。





第13図 土堆

出土遺物

土器 (20図103~110)

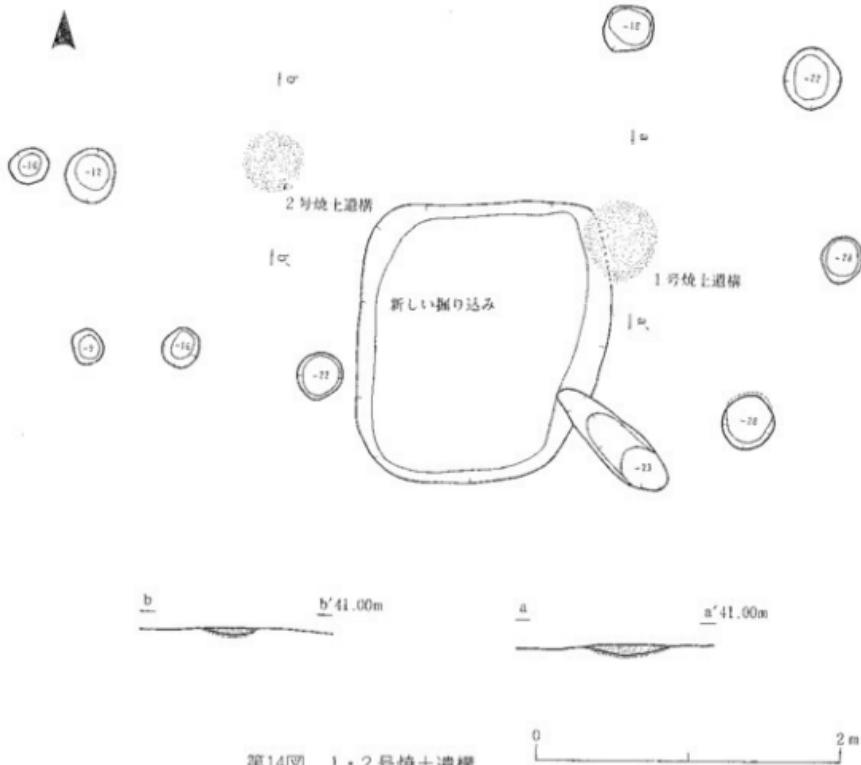
口縁部無文様や、撲糸文、柳目文の施されるものが出土している。

焼土遺構 (第14図)

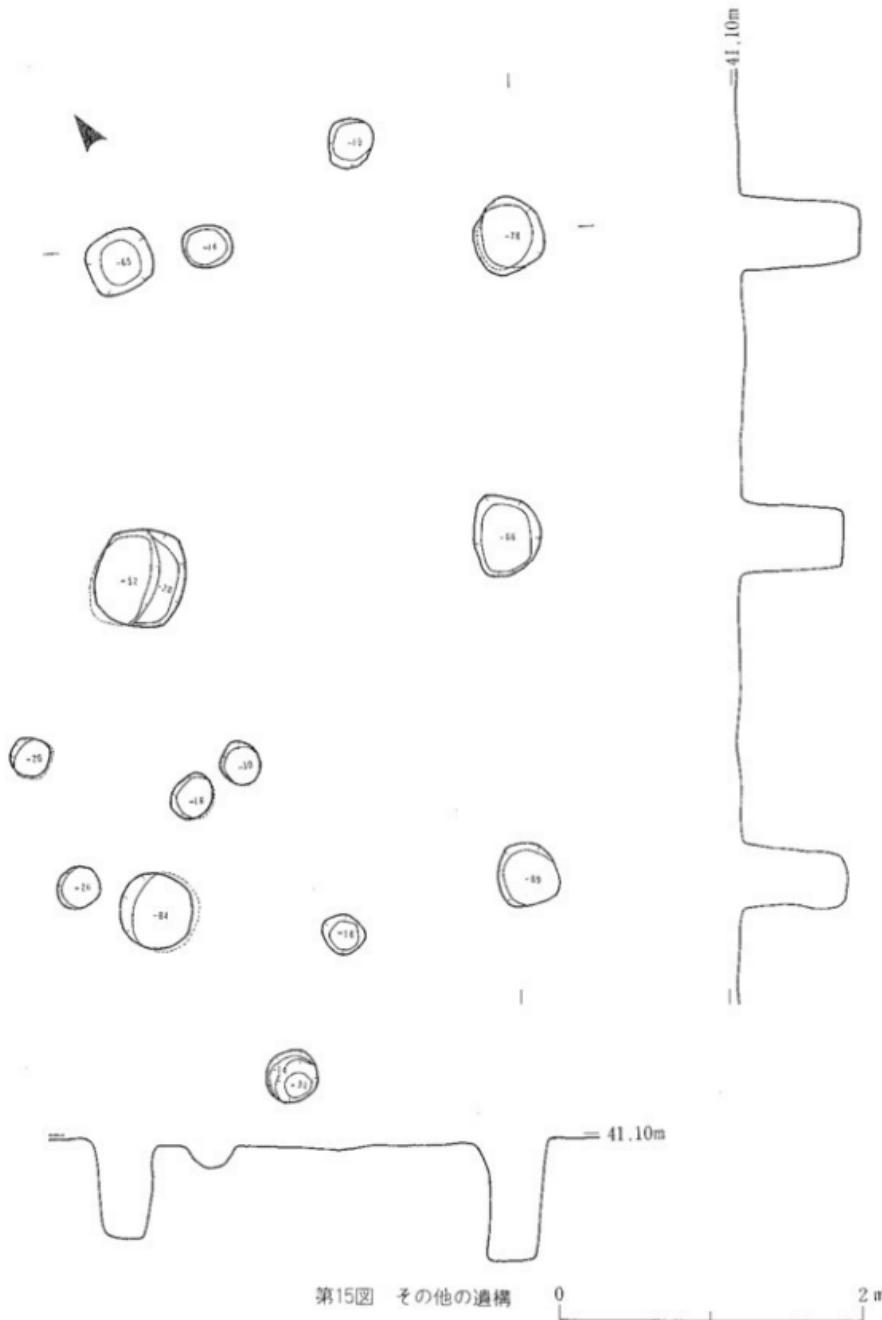
1・2号焼土遺構が調査区南側、3号焼土遺構が北側、4号焼上遺構が中央部で検出された。1・2・4号焼土遺構はローム面で確認され、良く焼け、周辺からは数個のピットが検出され、1号焼土遺構の焼土中より縄文土器片が数点出土した。3号焼土遺構は第2層中程度で検出され、良く焼けている。周辺に深鉢形土器(口縁部欠損)が二カ所に埋設されていた。

その他の遺構 (第15図)

調査区の北側で検出した。径40cm~50cm・深さ70cm~80cmを測り、しっかりした建物が想定される。ローム面での確認であるが、ローム層の崩れ込みや炉跡が認められず、居住施設としてではなく他の性格を有する施設としての使用が考えられる。なお、柱穴から縄文土器片2点と石皿状石器(第24図23)が出土している。

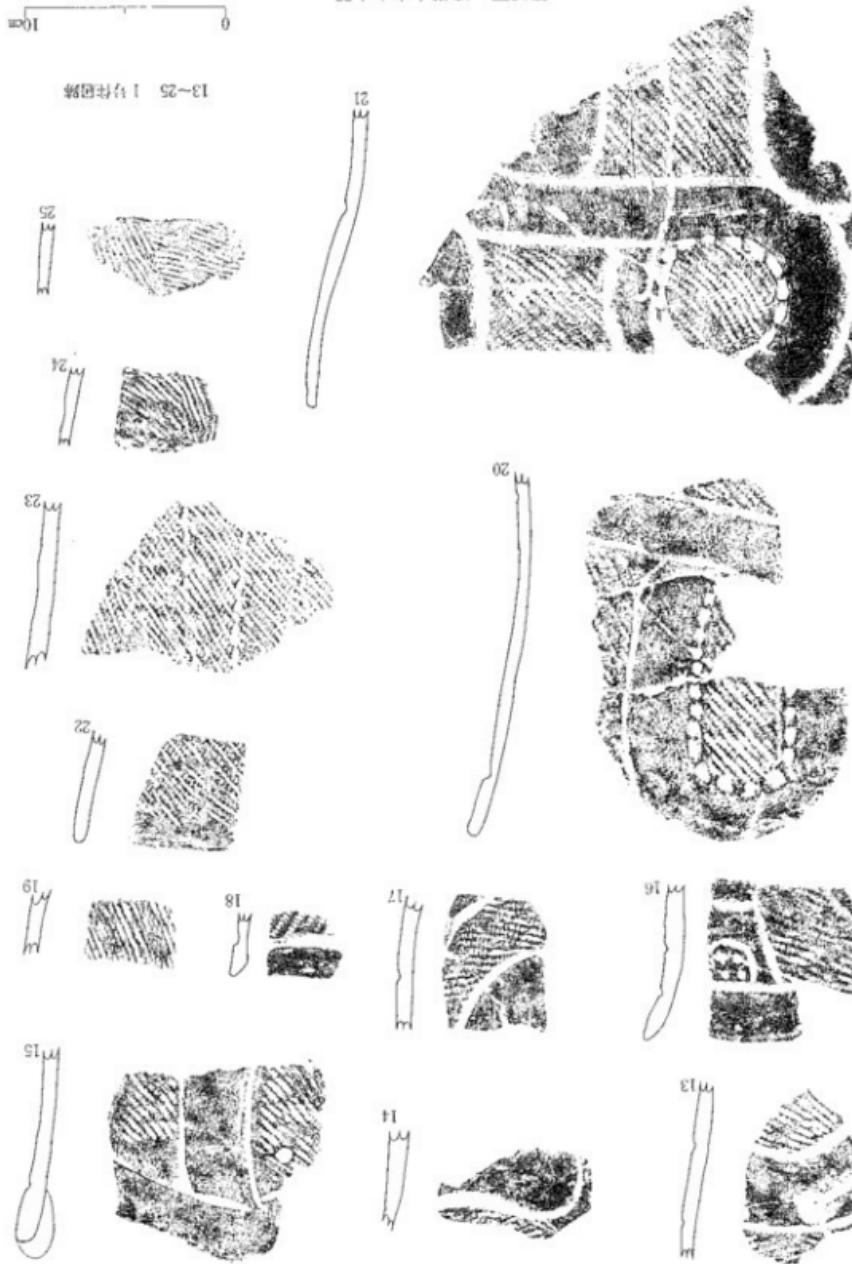


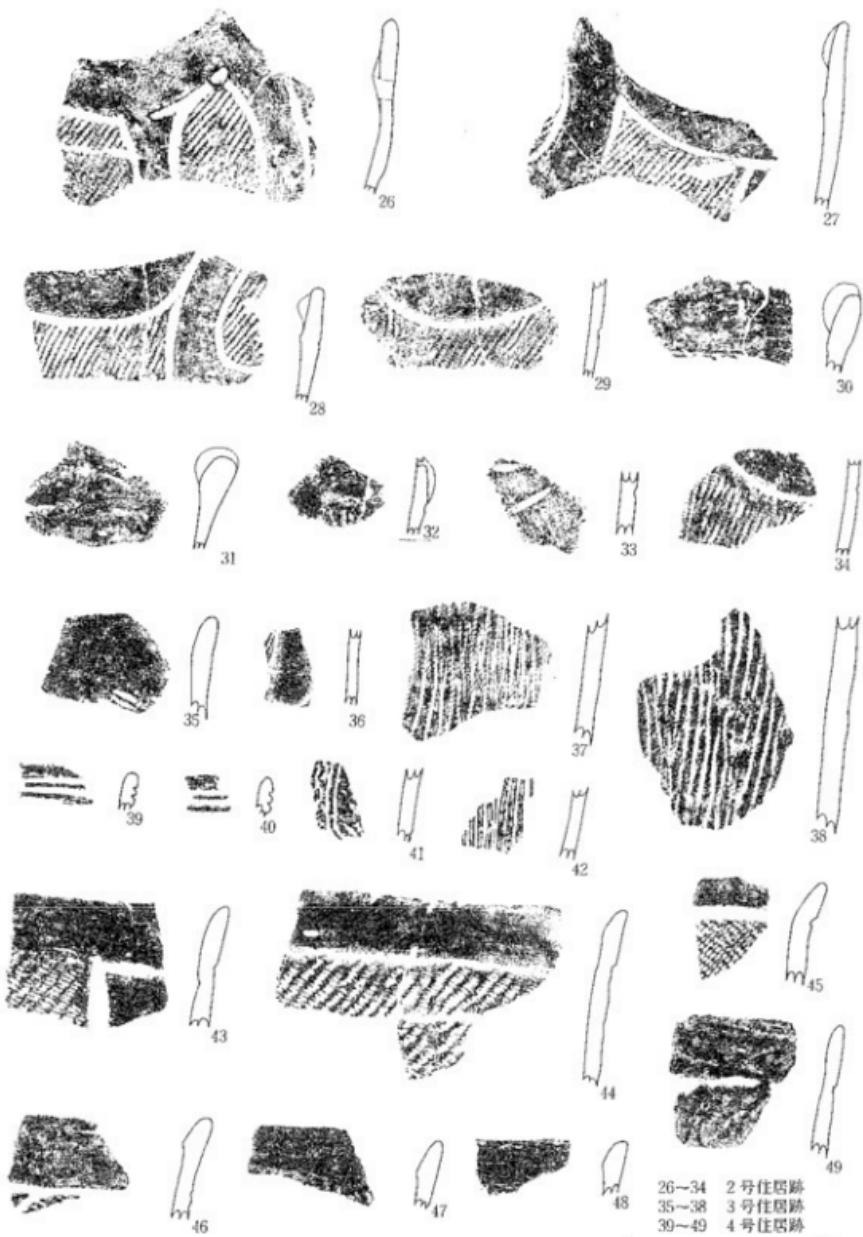
第14図 1・2号焼土遺構



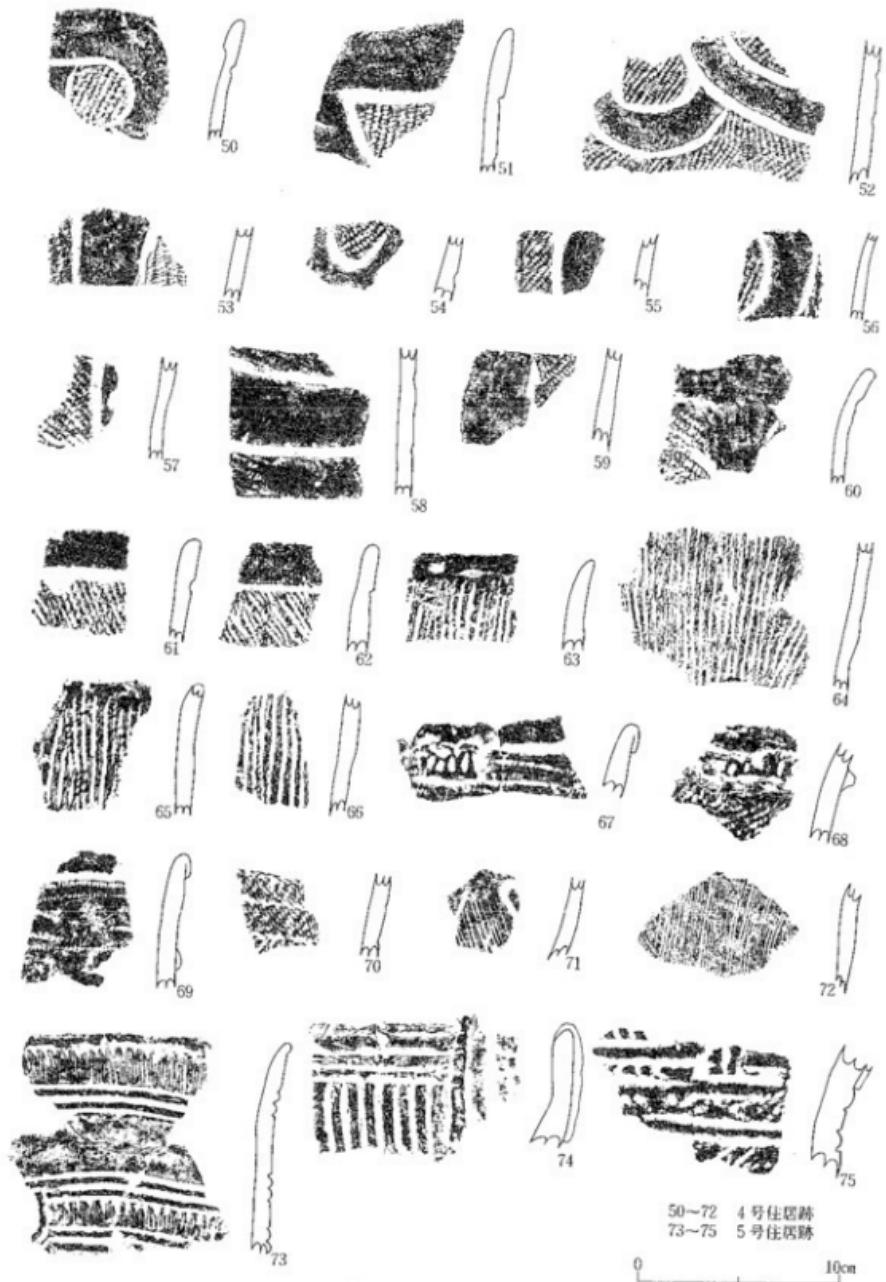
第15図 その他の遺構

第16图 遗物内出土玉器

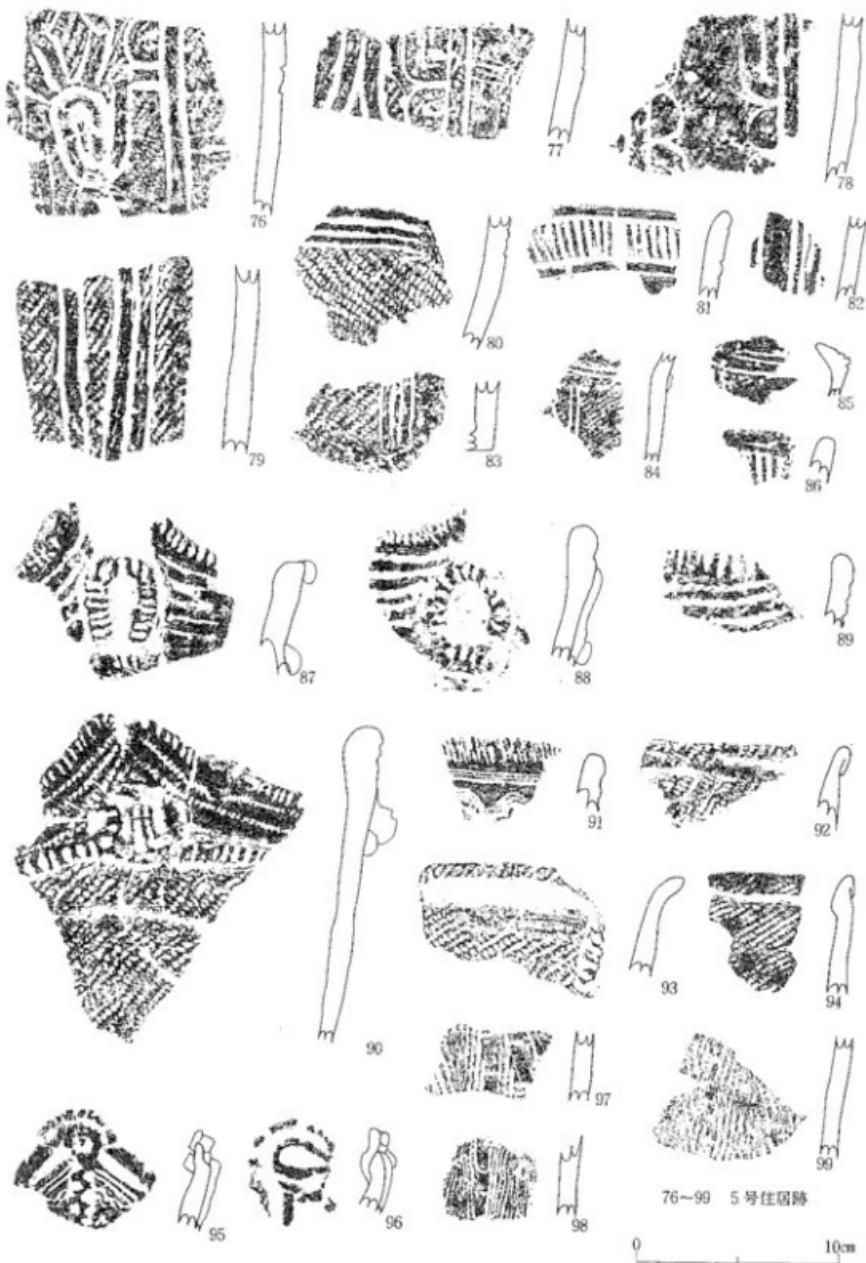




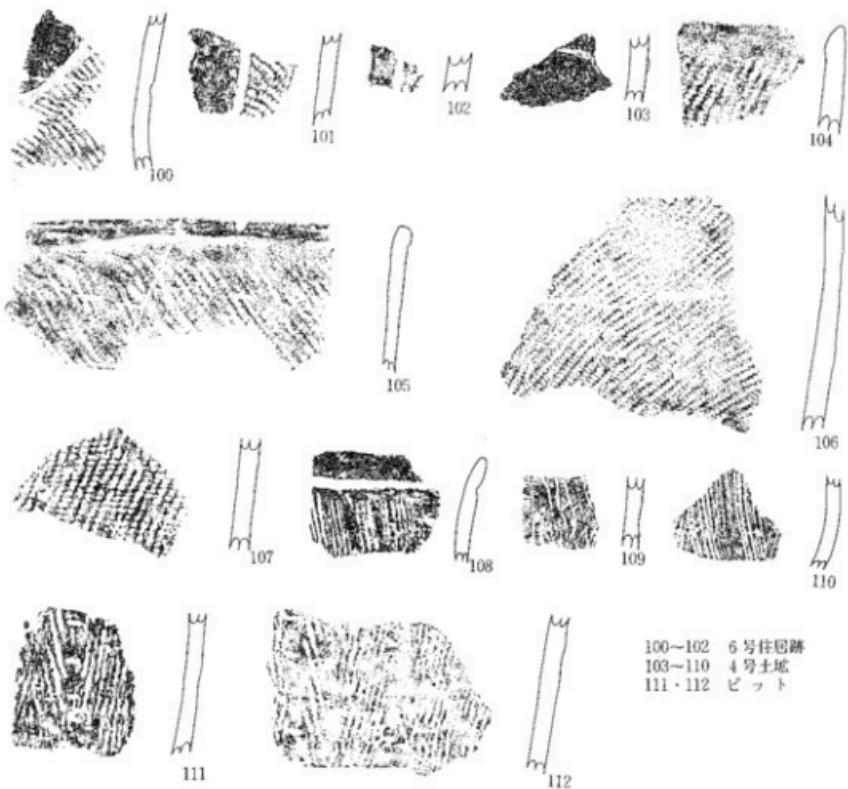
第17図 通構内出土土器



第18図 造構内出土土器



第19図 造構内出土土器



第20図 遺跡内出土土器

100~102 6号住居跡
103~110 4号土坑
111・112 ピット

0 10cm

土製品（第24図）

全て住居跡からの出土である。1～3は四角形、4は三角形を呈する。1～3は刻線と刺突、2は刺突列点文、4は凸状をなし刻線と刺突で文様を施している。1～3には砂の混入が多い。5は獸面を表現したものと考えられ、縄文を施した後に半截竹管状工具内面により文様を施す。鼻は欠けており4～5つ刺突を行っている。顎部のみの表現で体部がないことから、上器の把手と推測される。

石器

石鏃（第22図1・2・4・10～12、第23図16～20、第25図24～26）

有茎、無茎のものがある。2はアスファルト状の付着物が認められる。1・10は無砥石製、他は硬質頁岩製である。

石匙（第22図5・6、第25図27・28）

ツマミ部に対して刃部が平行する錐形の石匙である。29以外は片面加工で、全て硬質頁岩製である。

石錐（第23図21）

錐部が短いが、鋭く尖っている。黒巖石製である。

槍先状石器（第22図7・14、第25図29～31）

両面加工で先端が尖るものである。30は両端が鋭く尖るもので作りが良い。全て硬質頁岩製である。

ヘラ状石器（第25図34～37）

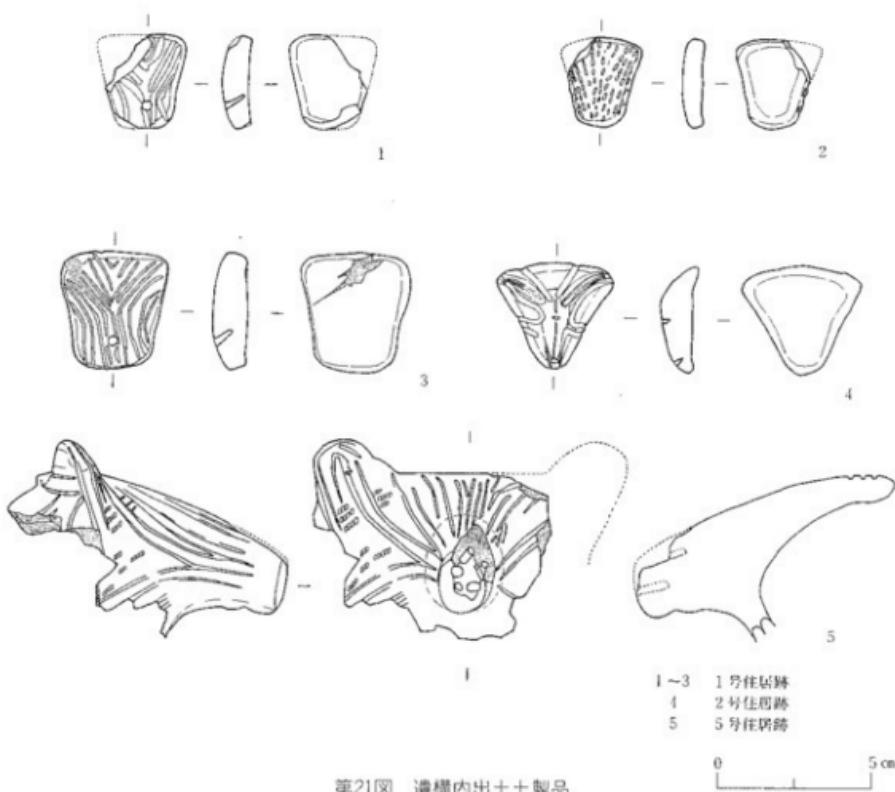
両面加工で刃部を作る。全て硬質頁岩製である。

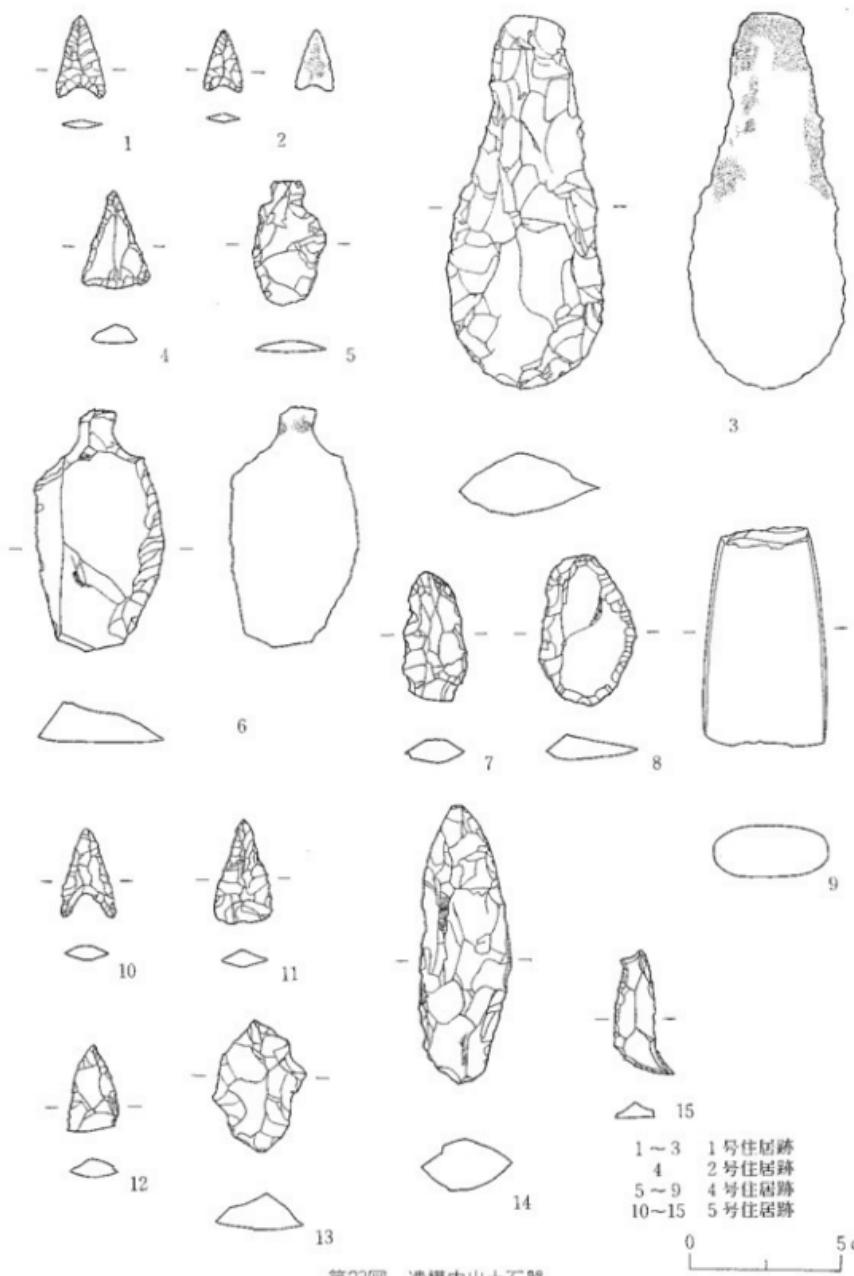
搔器（第22図13）

片面加工で、硬質頁岩製である。

打製石斧（第22図3）

両面加工である。柄を装着したと考えられる部分にアスファルト状の付着物が認められる。硬質頁岩製である。





第23図 遺構内出土石器

異形石器（第22図15）

片面加工で釣針形をなす。硬質頁岩製である。

磨製石斧（第22図9）

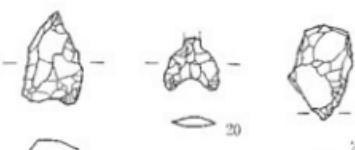
基部及び刃部の一部が欠けている。粘板岩製である。

凹石（第26図39・40）

両面に2～3個の凹部をもつものである。
40は凝灰岩製。41は閃綠岩製で、磨石・敲石としての使用痕も認められる。

磨石（第24図22）

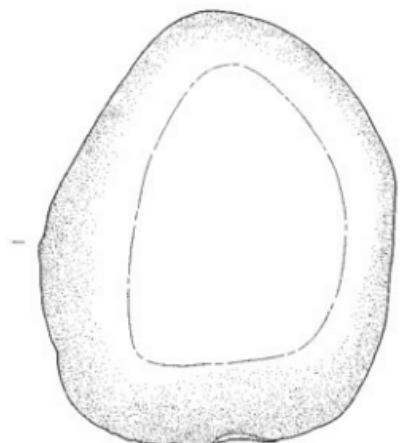
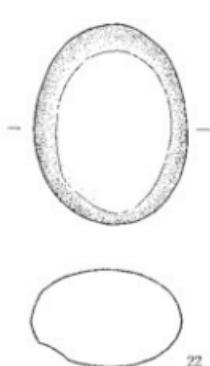
安山岩製で、磨滅が著しい。



16~21 2号土塁

0

5cm



22 6号住居跡
23 その他の遺構



第24図 遺構内出土石器

石皿（第26図41）

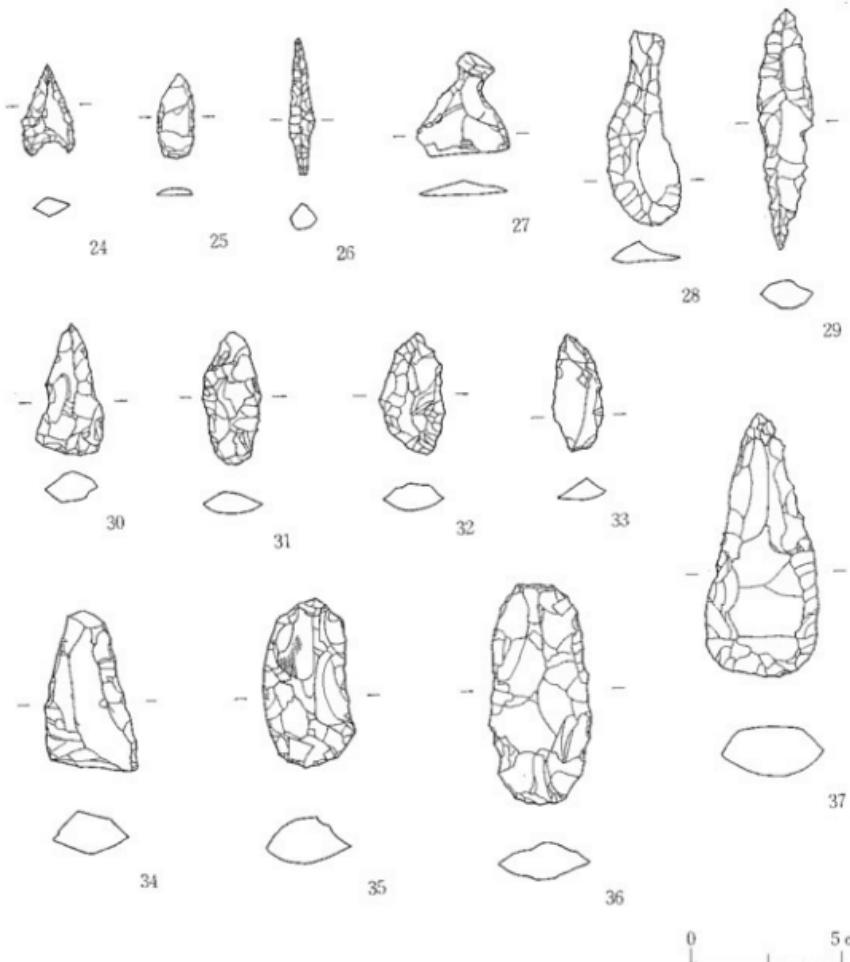
安山岩製で、縁部の一部である。

石皿状石器（第24図23、第26図42・43）

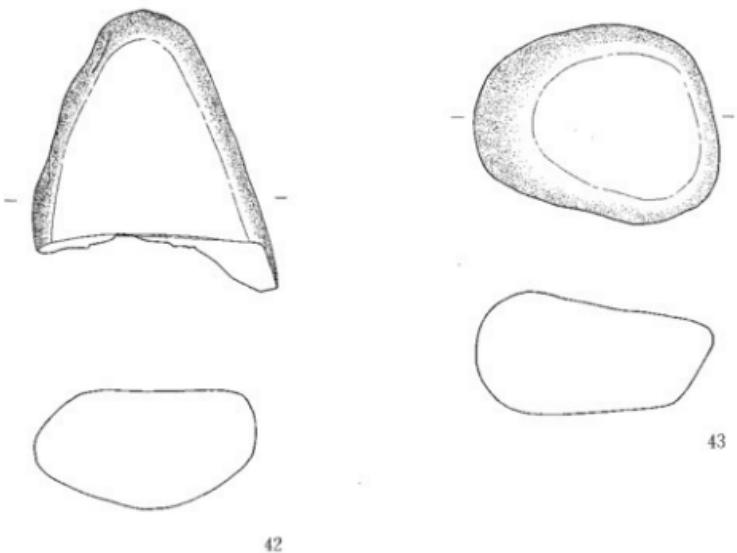
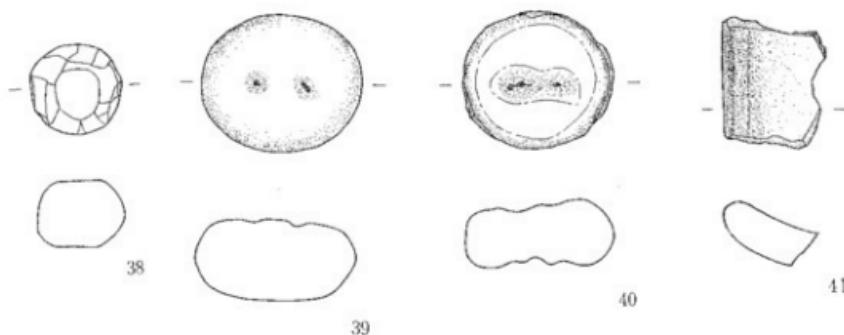
若干くほんだ自然面を利用したもので、磨滅が著しい。全て安山岩製である。

石製品（第26図38）

上面、下面、側面を磨いて多角面を作っている。花崗岩製である。



第25図 遺構外出土石器



0 10cm

第26図 造構外出土石器

まとめ

遺構について

下堤G 遺跡検出遺構は、住居跡6軒、土塀4基、焼上遺構4ヵ所、その他の遺構である。

1～4・6号住居は、調査区中央及び南側の台地縁辺部に構築され、円形、椭円形を呈する。規模は4号住居跡が長軸6.5m、短軸5.3mと比較的大形で堀り込みも深い。炉は、土器埋設部、椭円形で鍋底状を呈する堀り込み、浅く溝状を呈する堀り込みがセットとなるものである。複式炉の一形態とも考えられるが、今後類例の増加をまって検討する必要がある。3・4号住居跡の土器埋設部は作り替えが認められ、4号住居跡には中央部にも土器埋設炉が確認された。炉の方向は、1・4・6号住居跡が南東方向（沢部）なのに対し、2・3号住居跡は北の方向である。これは入口を考慮した住居間の位置的関係がみられ、入口は1・4・6号住居跡が西側、つまり住居の南側と考えられる。

住居跡の時期は、1～4・6号住居跡が縄文時代中期末葉の大木10式期である。しかし、2号住居跡は出土遺物からしてやや新しい時期と考えられる。5号住居跡は縄文時代前期末葉から中期初頭にかけての時期である。

遺物について

遺構内外出土のものを一括して類別し、さらに群に大別して述べる。

1類（第27図113）

細い粘土紐を貼り付けて幾何学的な文様を作り出し、半截竹管状工具内面により連続爪形文を施すものである。

2類（第27図114）

半隆起線文を施すものである。頸部が内反し、口縁部が立ち上がる器形をなす。

3類（第27図115～129）

口縁部に、粘土紐貼り付け及び半隆起線による直線文、波状文が施され、胴部に半隆起線の波状文及び直線文が並行して縱走するものである。118～122は撚糸文を地文とし、118・119には粘土紐の貼り付けがみられる。129は隆帶文や半隆起線文が複雑に施文されている。

4類（第17図41～44、第18図73～75、第19図76～86、第27図130～140、第28図139～142、第31図202）

半隆起線文を主体とするもので、刻目文・格子目状文及び隆帶文などを施すものである。202は小形の円筒形をなし、胴部二ヵ所（相対して）に粘土紐を貼り付けている。口縁部は横走する半隆起線文と縦に短い半隆起線文を並べ、胴部はあらかじめ半截竹管状工具の両端を軽くあてて引き格子目状に文様を施し、後に強くあてて引いた半隆起線文を幾何学的に施す。

5類（第18図67～69、第19図87～91、第28図143～148）

口縁部文様帶に隆帶及び撚糸圧痕文などを施すものである。87・88はすき間のある山形口縁90・

143は二又の山形口縁である。

6類 (第12図11、第19図92~94、第28図149~160)

複合口縁をもつもの、口縁部に撚糸圧痕や単節繩文を施すものである。11は山形口縁で頂部より隆脊が垂下し撚糸圧痕文（口縁部、口唇部）が施される。149は円筒深鉢形を呈し、口縁部が二段に作られ単輪絡条体圧痕文が施される。155は粘土紐をやや盛り上げアーチ状に貼り付けている。160の口唇部にはL R原体を刻目状に圧痕する。

7類 (第19図95・96)

いずれも小突起部であり、かなり複雑な作りである。

8類 (第29図161)

頸部が内傾して立ち上がる口縁部で、浅鉢形の器形をなす。口縁部に撚糸圧痕文を施す。

9類 (第9図7)

口縁部に撚糸圧痕文を並行及び>状に施し、頸部に単輪絡条体圧痕文が施される。また8字状に粘土紐が貼り付けられ、胸部地文と同一の調文が施される。

10類 (第4図1、第7図5・6、第9図8、第12図12、第16図13・14・17・18、第17図35・36・43~49、第18図50~63、第20図100~105・108、第29図162~178)

曲線的な磨消帯及び口縁部無文帯のものである。磨消帯は沈線で区画され、J字状・波状などバラエティーに富む。口縁部は平縁が主で、無文帯と地文帯の境に沈線を巡らすものとそうでないものがある。深鉢形の器形で大形のものが多いが、口縁部がすぼんだり小形の土器もみられる。

11類 (第4図3、第9図10、第16図16・20・21)

10類と同様であるが、沈線によって区画された部分に刺突や、長梢円形、円形に列点文を加飾するものである。3・10は下から、20・21は斜めからの刺突で、20は波状口縁をなす。

12類 (第7図4、第16図15、第17図26~34)

曲線的な磨消帯を施すが、文様や器形などが11・12類に当てはまらないものである。26~29は同一個体で、山形口縁をもち頂部下に孔を穿ち、口縁部内面には稜線がみられる。30・31は内面に32は外面に貼り付けが施される。

13類 (第29図179・180)

沈線で文様を施すものである。179はS字状の連鎖文が垂下する。

14類 (第29図181~188、第31図203)

口縁部を主に沈線で施文するもので、平行沈線文が多い。器形は深鉢形・浅鉢形・鉢形・壺形土器である。203は作りの良い浅鉢形土器で、変形工字文が施され二側一対の瘤が付く。体下部に繩文が残る。

15類 (第19図97~99、第20図111・112、第30図189・190)

本日状撚糸文の施されるものである。

16類（第30図191～193）

口縁部に羽状縄文の施されるものである。

17類（第9図9、第16図19、第17図37・38、第18図64～66、第20図109、第30図194～198）

撚糸文の施されるものである。

18類（第18図71・72、第20図108・110、第30図199～201）

櫛状工具により櫛目文を施すものである。

以下、群別して時期・型式について述べると、

1群は1～8・15類が相当し、縄文時代前期末葉から中期前葉の土器を一括した。1～3は大木6式土器に比定されるもので、半隆起線文や隆帯が施されるものである。4類は半隆起線文が幾何学的に施されるもので、北陸地方の新保・新崎様式の土器と考えられる。5類は口縁部文様帶に隆帯及び撚糸圧痕文が施され山形口縁をもつなど、円筒上層a式土器に比定できるものである。また6類もかなり近いものと考えられる。8類は撚糸圧痕文の施される浅鉢形土器で、大木7b式土器に比定できるものである。16類の木目状撚糸文の施される土器も本群に含まれるものである。

2群は10～12・17類が相当し、中期末葉のものを一括した。J字状・波状などの曲線的な磨消帶及び口縁部が無文帶をなすもので、大木10式土器に比定されるものである。11類は刺突文・列点文が加飾される。12類は器形や文様形態が14・15類と比して特異であり、本型式の中でもやや新しい時期と考えられる。17類の櫛目文を施す土器も本群に含まれるものである。

3群は13類が相当する。沈線で幾何学的な文様を施すもので、縄文時代後期の土器である。

4群は15類が相当する。薄手の精製土器に沈線で文様を施すもので、縄文時代晩期の土器である。

9類の土器については今後の資料増加をまって検討する必要がある。

住居跡出土土器

1号住居跡 10・11・17類

2号住居跡 12類

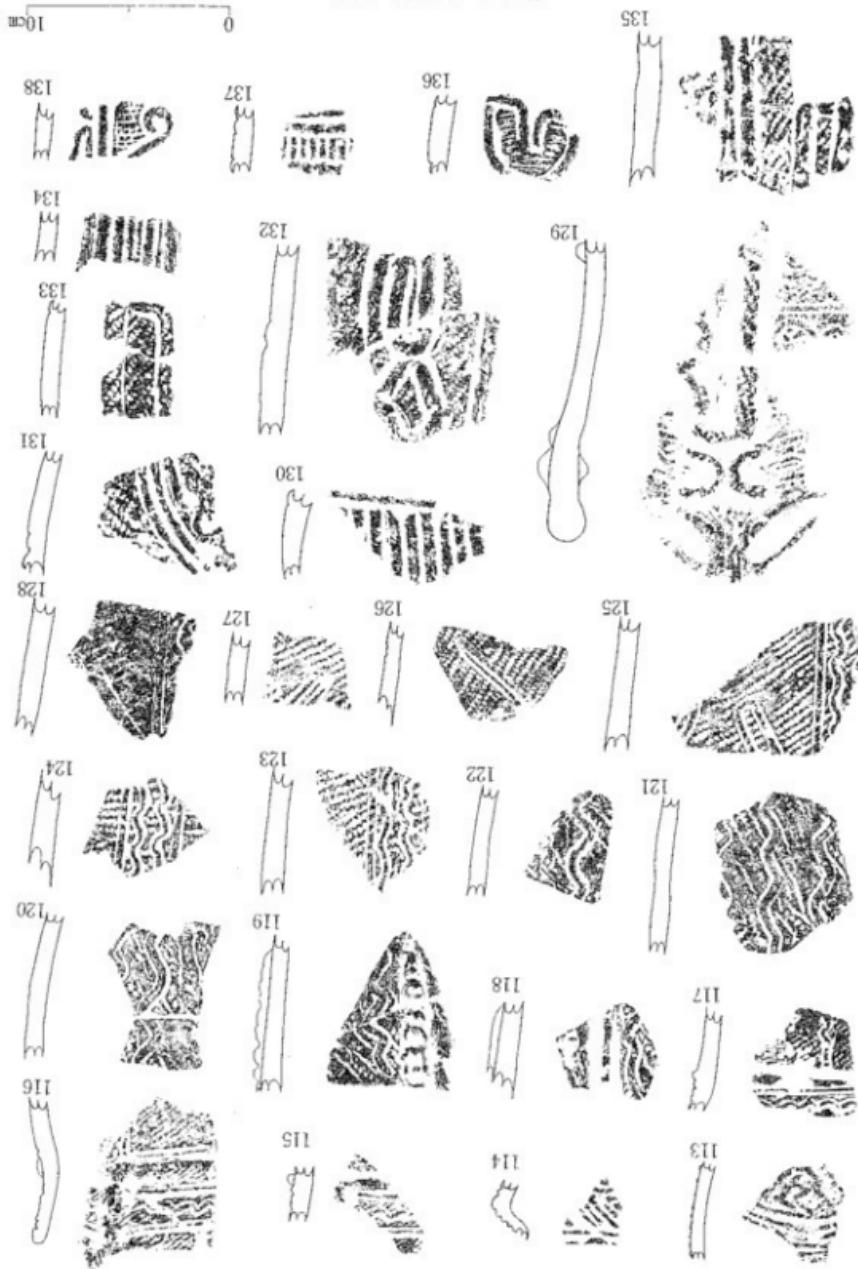
3号住居跡 10・17類

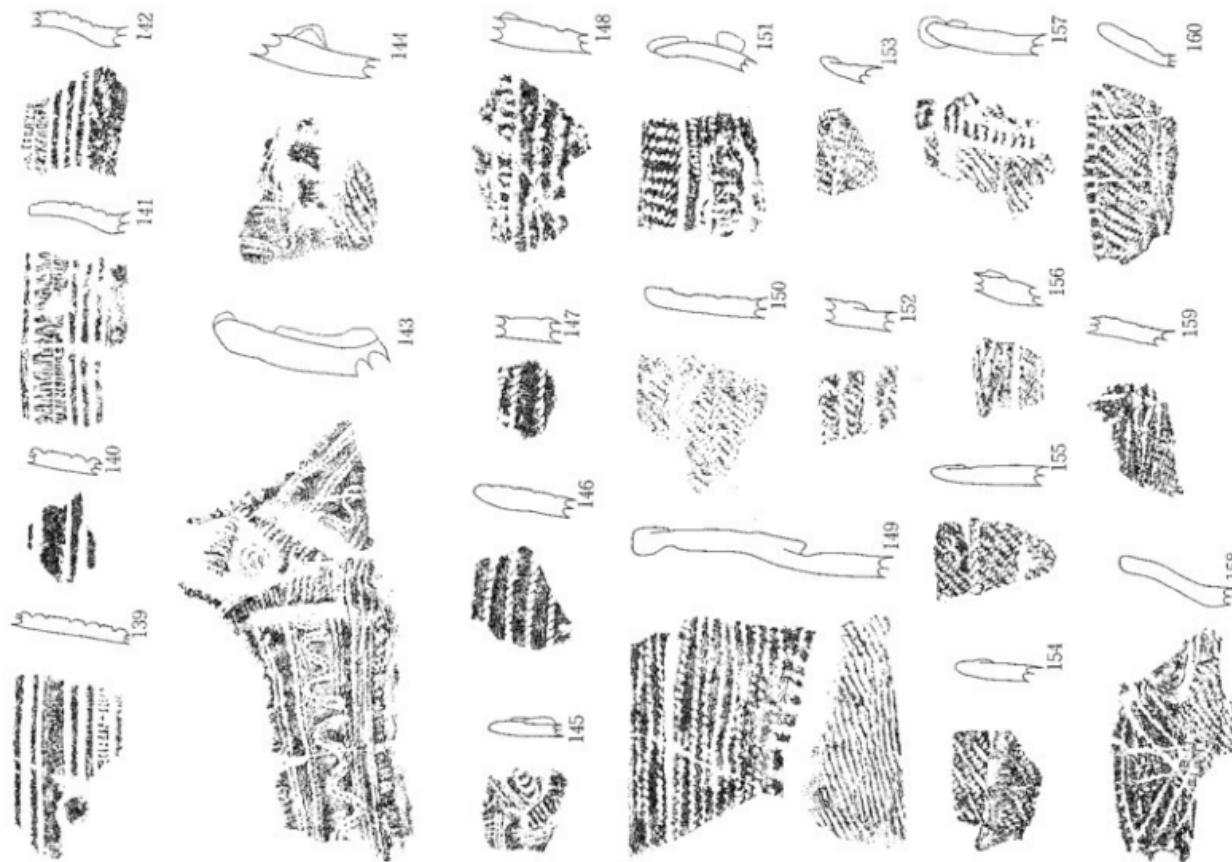
4号住居跡 10・17・18類（4・5類が少量、9類が1個体）

5号住居跡 4・5・6・8・15類

6号住居跡 10類

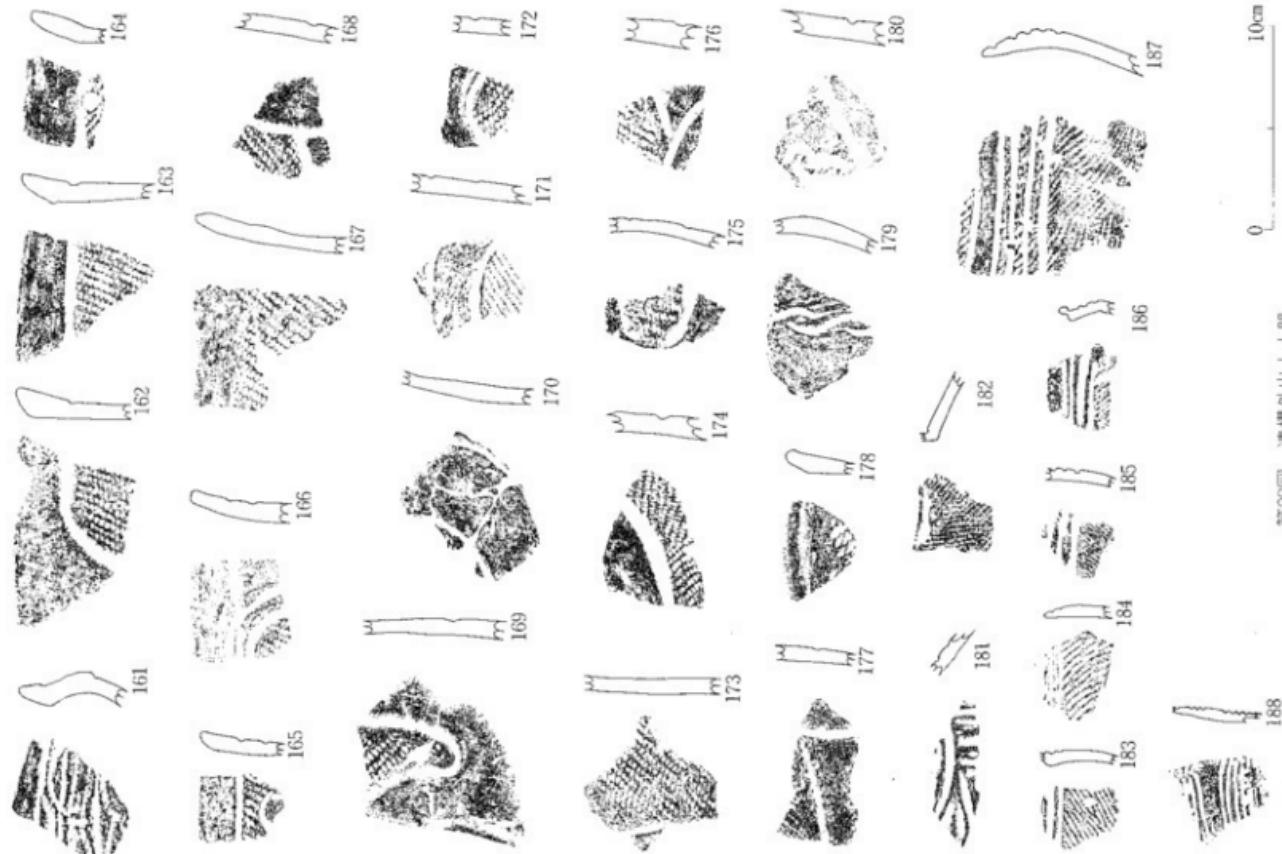
第27图 遗物外出土土器





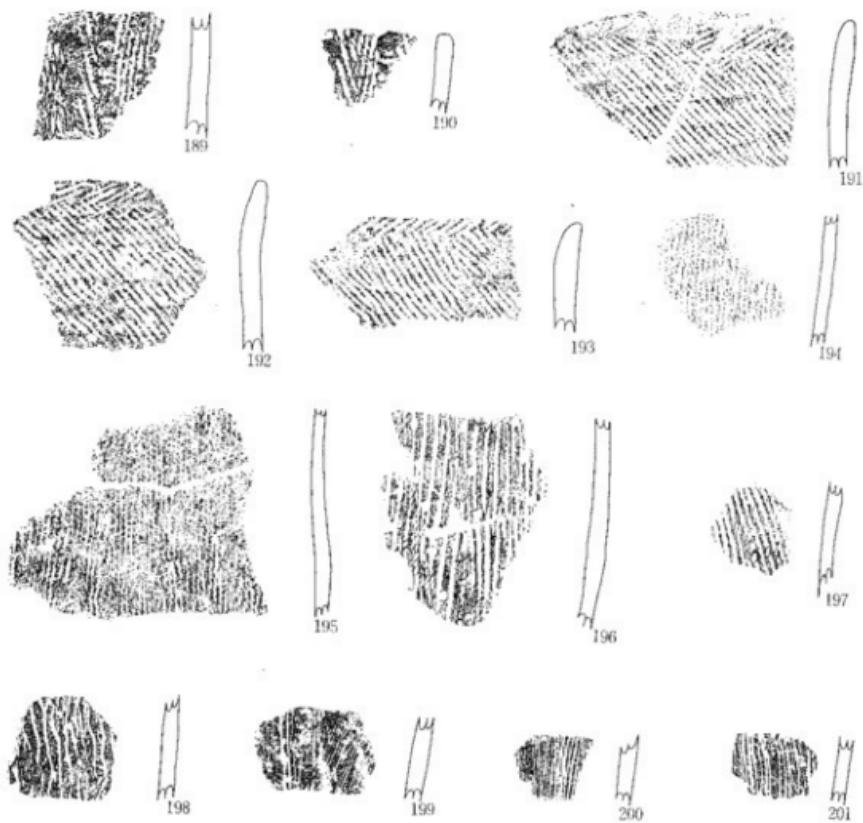
第28圖 遺構外出土土器

0 10cm



第29圖 遺構外出土土器

0 10cm



第30図 遺構外出土土器

0 10cm



202



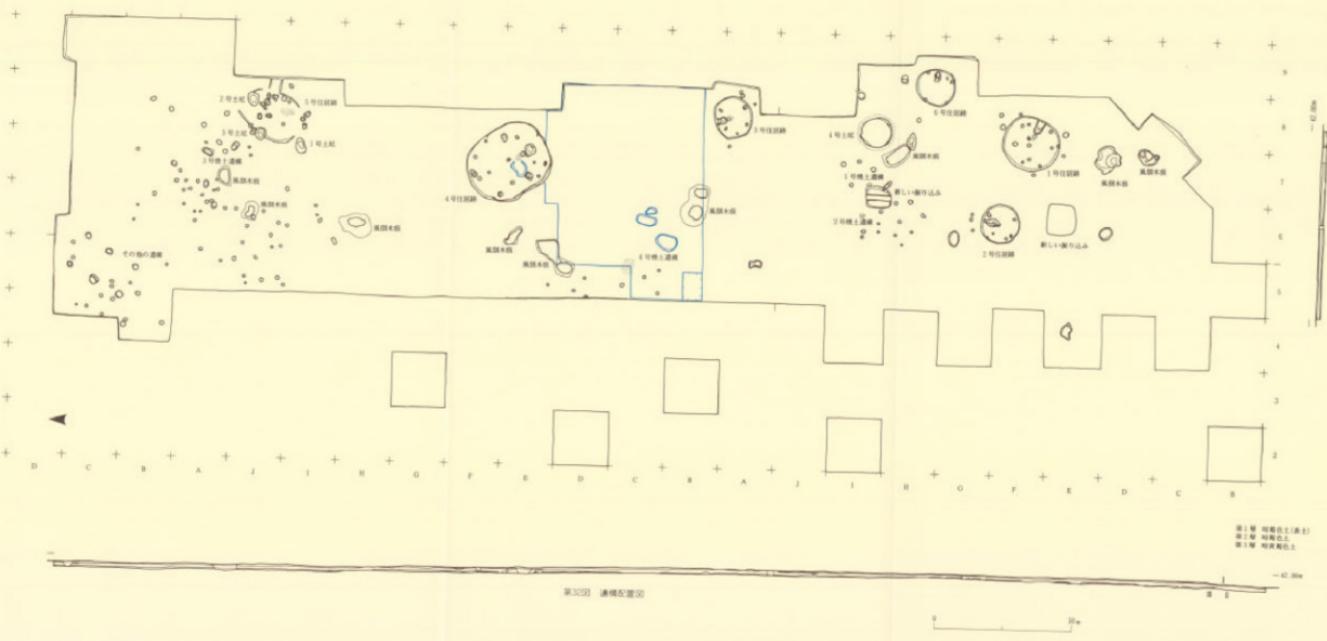
203

0 10cm

第31図 遺構外出土遺物

参考文献

- 秋田県教育委員会：「秋田県立中央公園スポーツゾーン地域内遺跡発掘調査報告書 脊板袋I遺跡」 秋田県文化財調査報告書第92集 1982
- 秋田県教育委員会：「内村遺跡発掘調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第92集 1981
- 秋田県教育委員会：「梨ノ木塚遺跡発掘調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第63集 1979
- 秋田市教育委員会：「小阿地_{下堤遺跡}坂ノ上遺跡発掘調査報告書」 1976
- 秋田市教育委員会：「下堤D遺跡発掘調査報告書」 1982
- 梅宮 茂 : 「複式炉文化論」 福島考古第15号 福島県考古学会 1974
- 協和町教育委員会：「米ヶ森遺跡発掘調査報告書」 1977
- 芹沢長介 坪井清足他：「繩文土器大成 第1巻早・前期」 講談社 1982
- 芹沢長介 坪井清足他：「繩文土器大成 第2巻中期」 講談社 1981
- 相馬市教育委員会：「馬見塚遺跡」 福島県相馬市文化財調査報告書 1982
- 丹羽 茂 : 「大木式土器」 繩文文化の研究4 繩文土器Ⅱ 雄山閣出版 1981
- 丹羽 茂 : 「福島県における繩文時代中期の住居・集落跡研究の現状と問題点」 福島考古第15号 福島県考古学協会 1974
- 中村良幸 : 「『複式炉』について 一岩手県を中心として 一」 考古風土記 第7号 1982
- 日黒吉明 : 「住居の炉」 繩文文化の研究8 社会・文化 雄山閣出版 1982

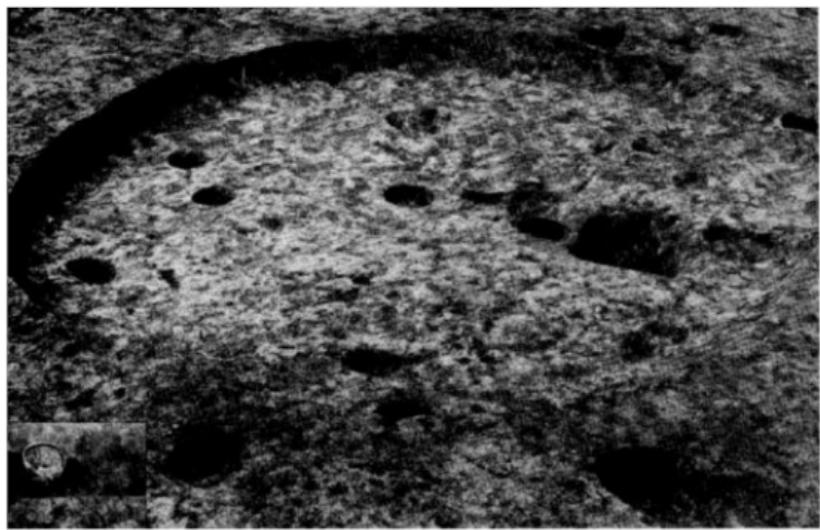




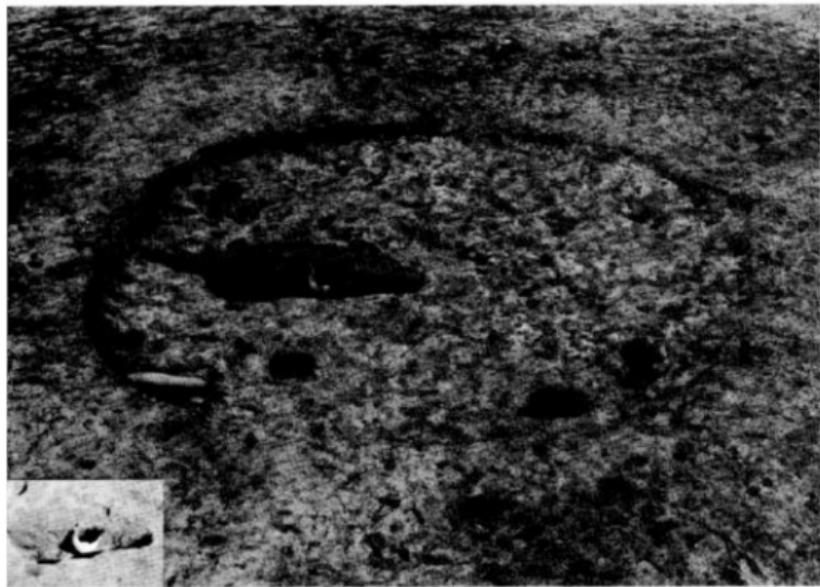
調査前 (北西→)



図版1 遺跡全景 (北→)



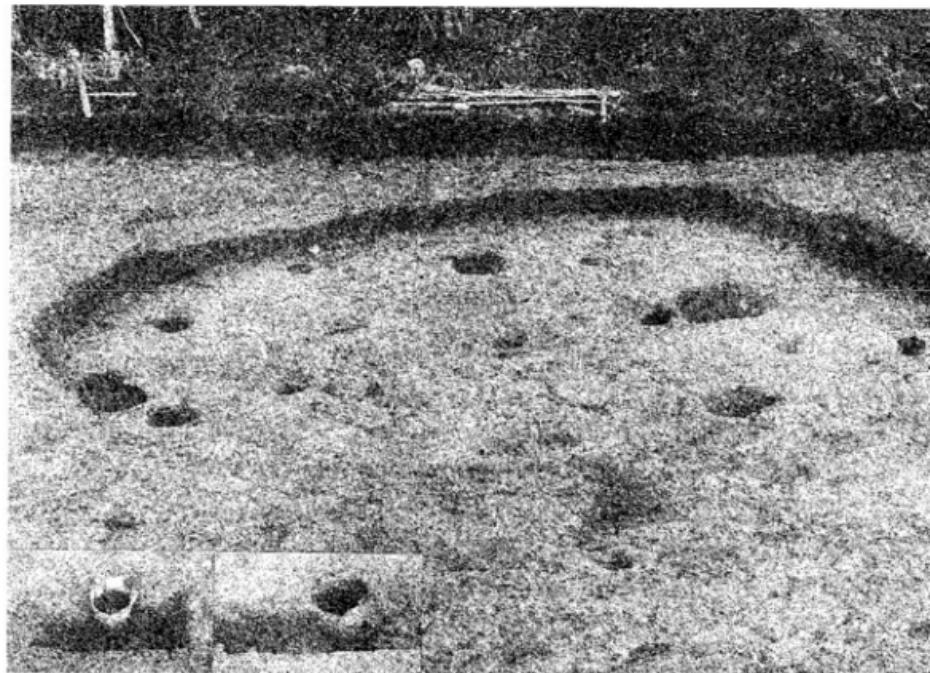
1号住居跡（南東→）



圖版2 2号住居跡（西→）



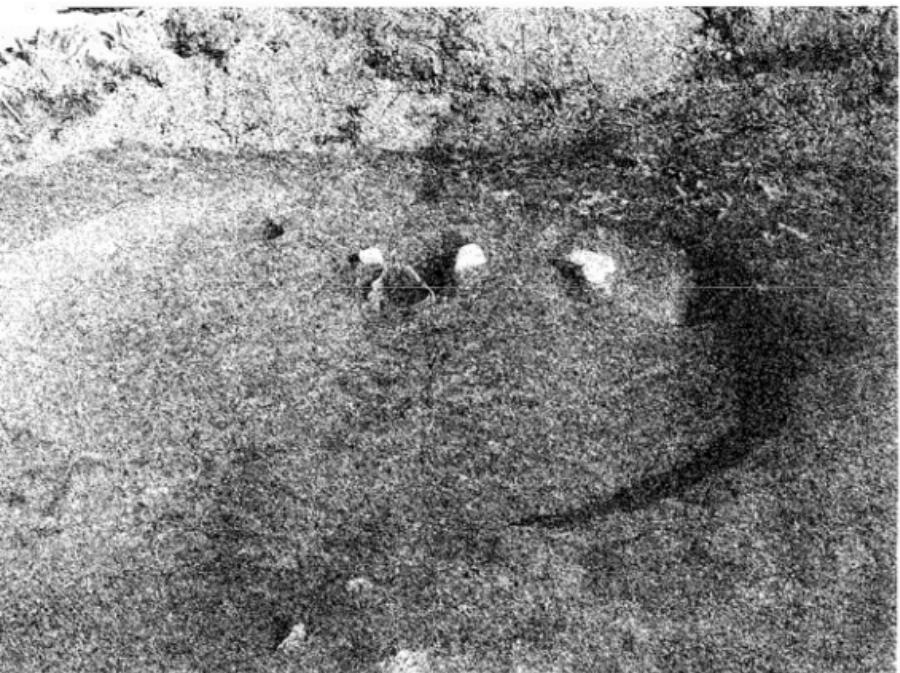
3号住居跡（西→）



図版3 4号住居跡（西→）



5号住居跡（西→）

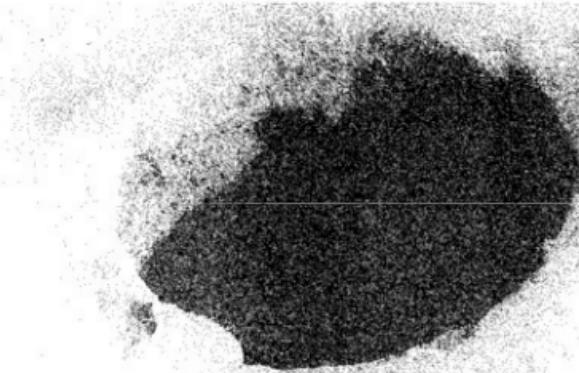


図版4 6号住居跡（西→）

2号土塙
土層断面
(西→)



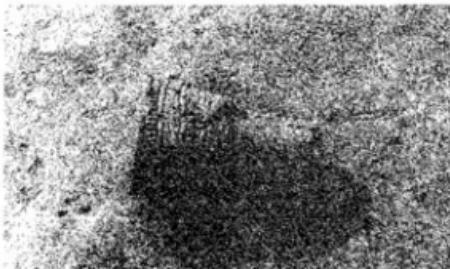
4号土塙
土層断面
(西→)

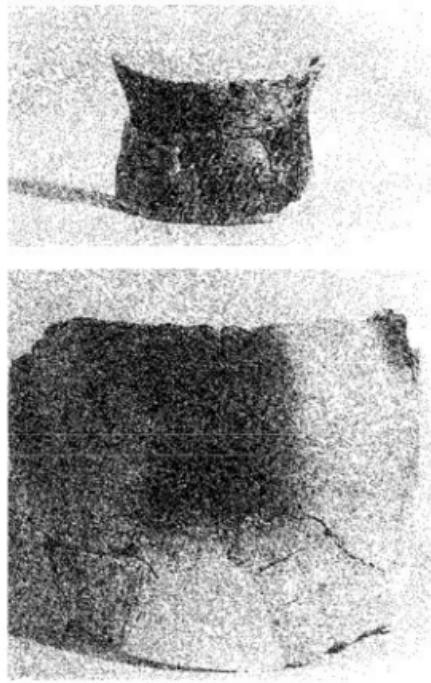


图版 5

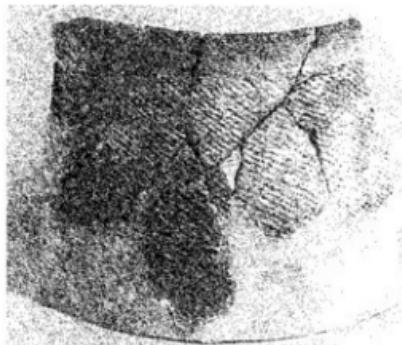
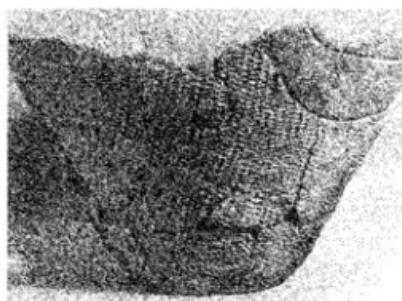
4号土塙
(西→)

遗物出土状态



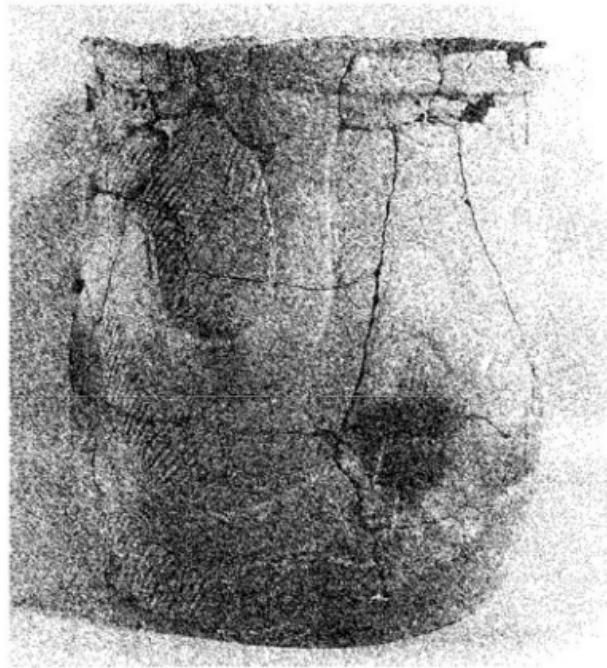
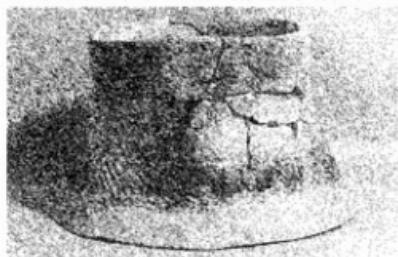
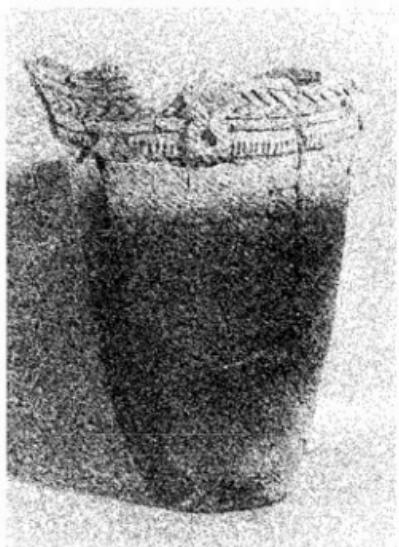


1号住居跡出土



2号住居跡出土

3号住居跡出土



圖版 7 4號住居跡出土



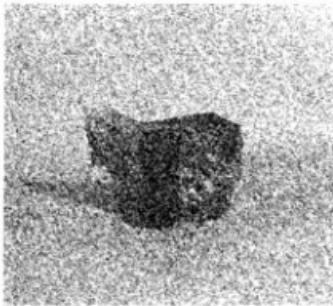
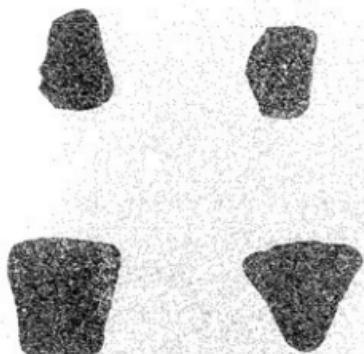
5号住居跡出土



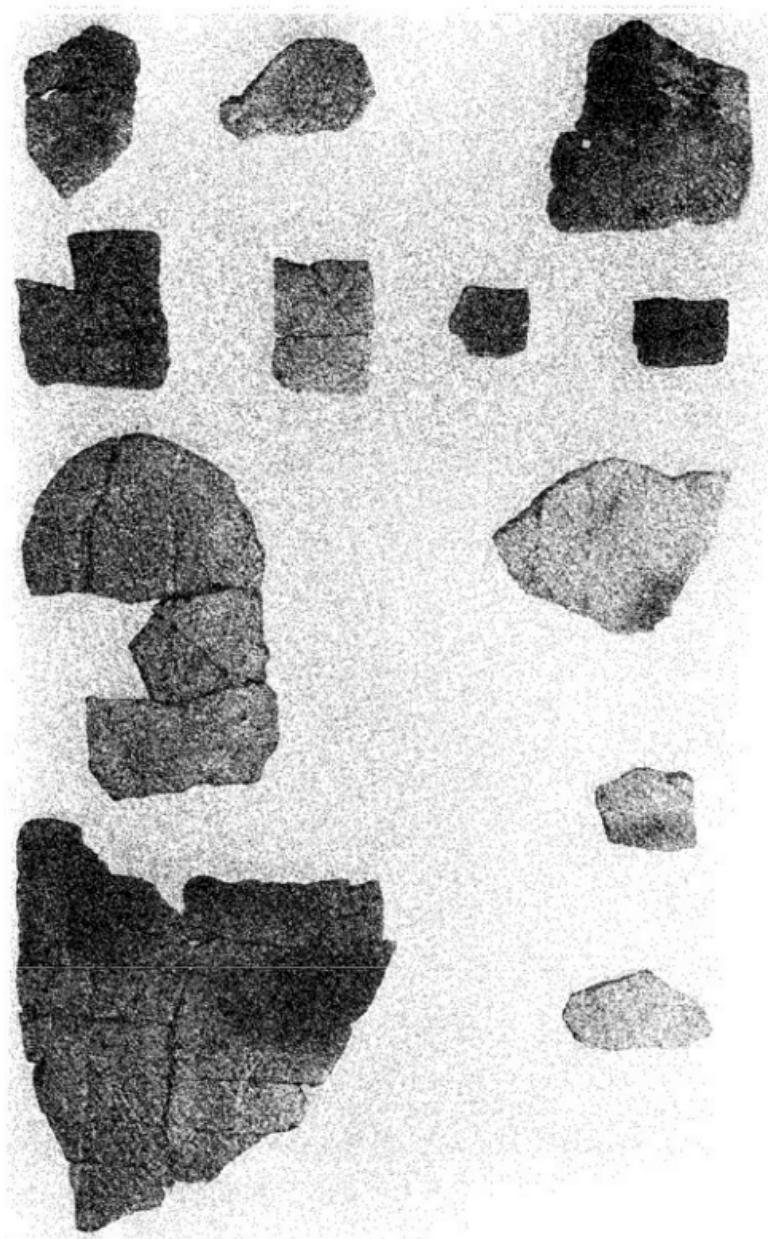
6号住居跡出土



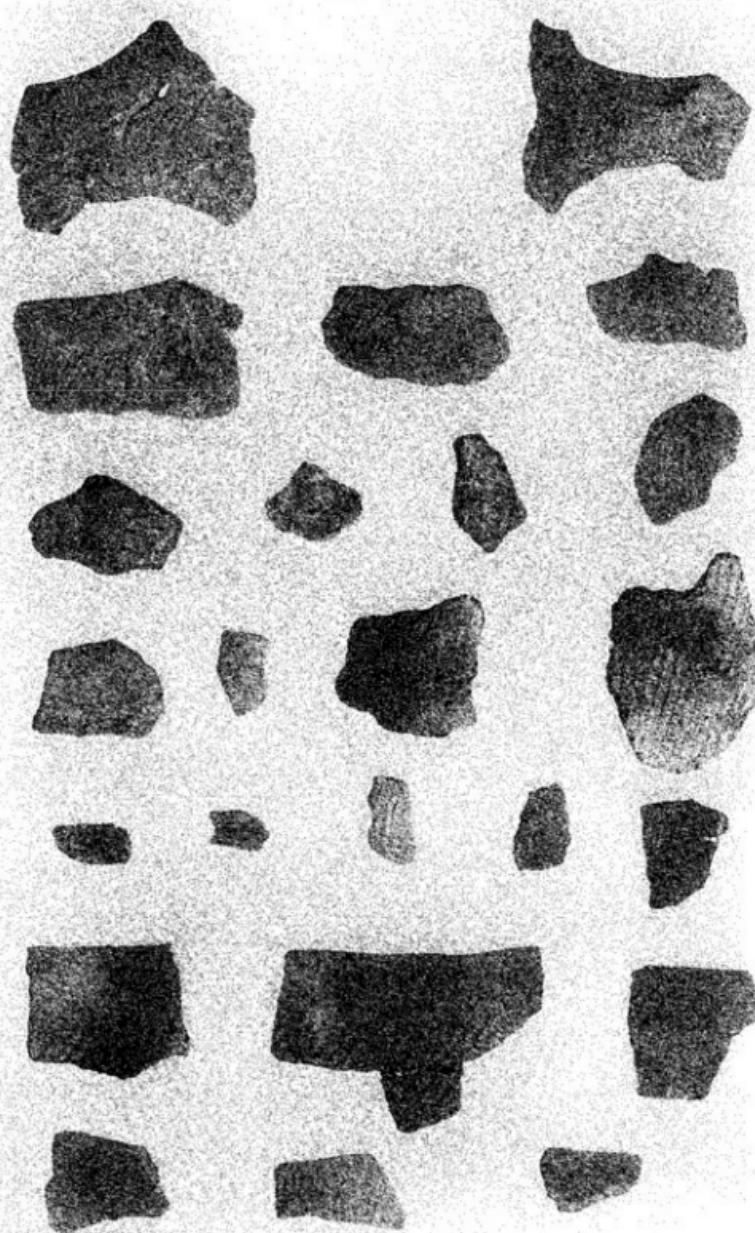
遺構外出土



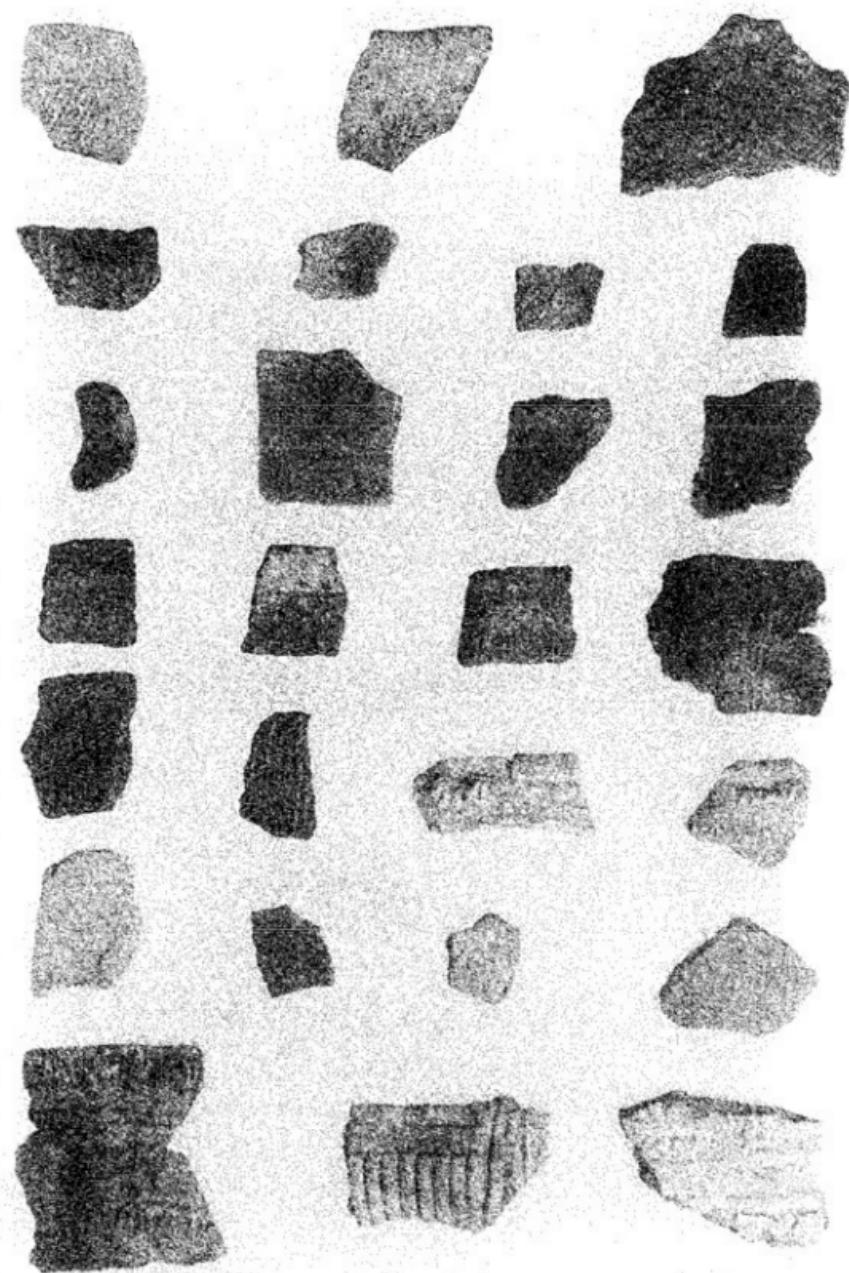
土製品



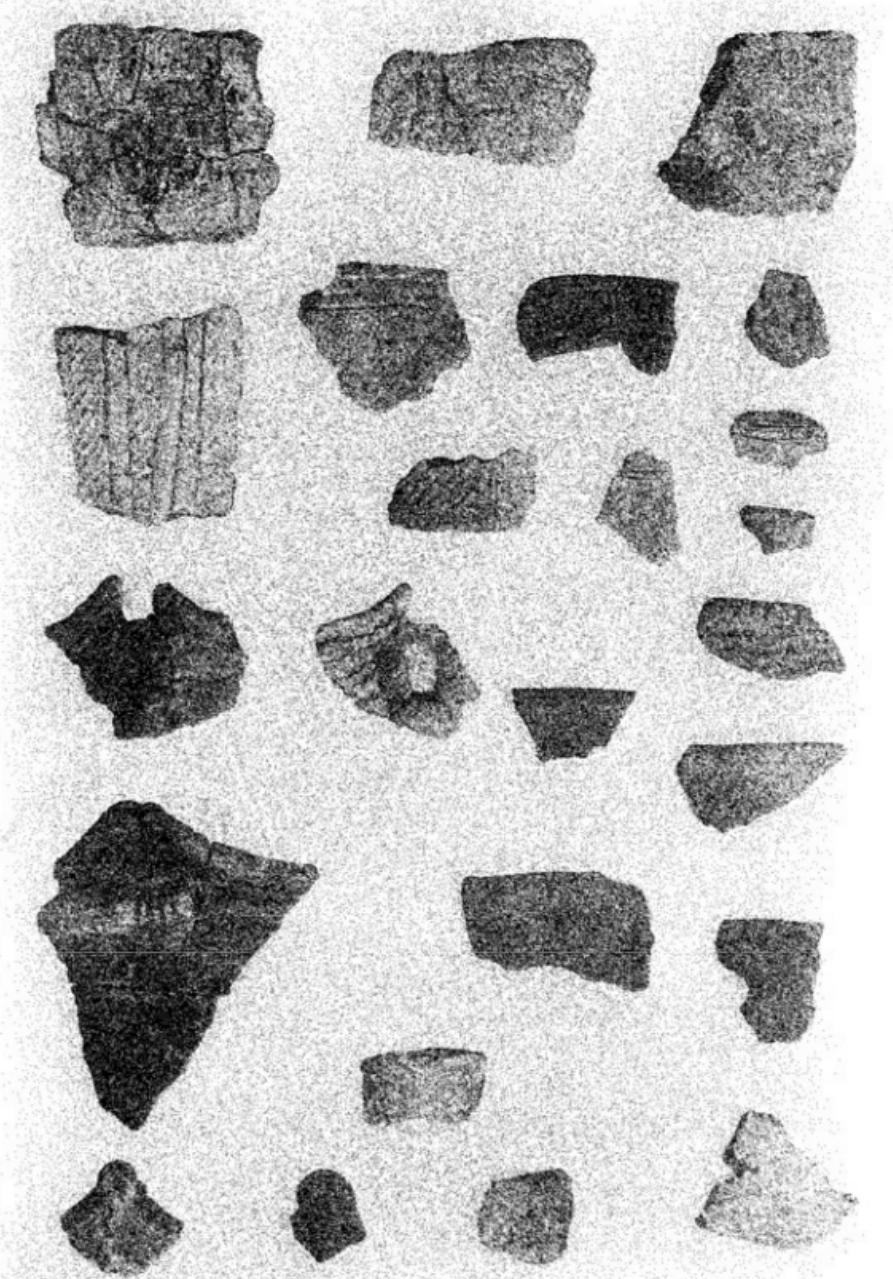
図版9 遺構内出土土器



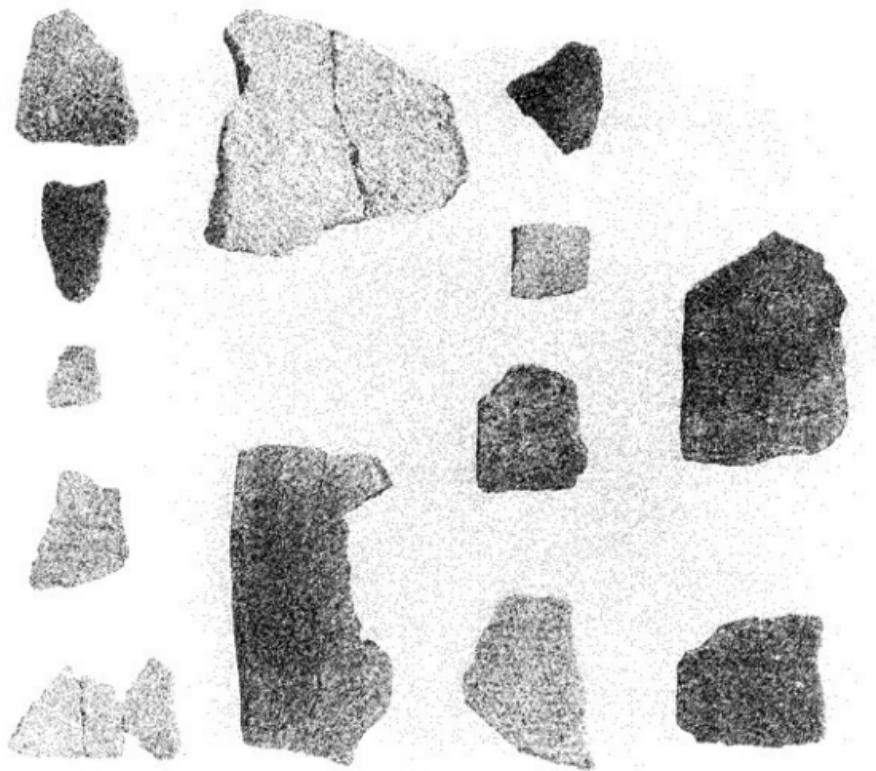
図版10 遺構内出土土器



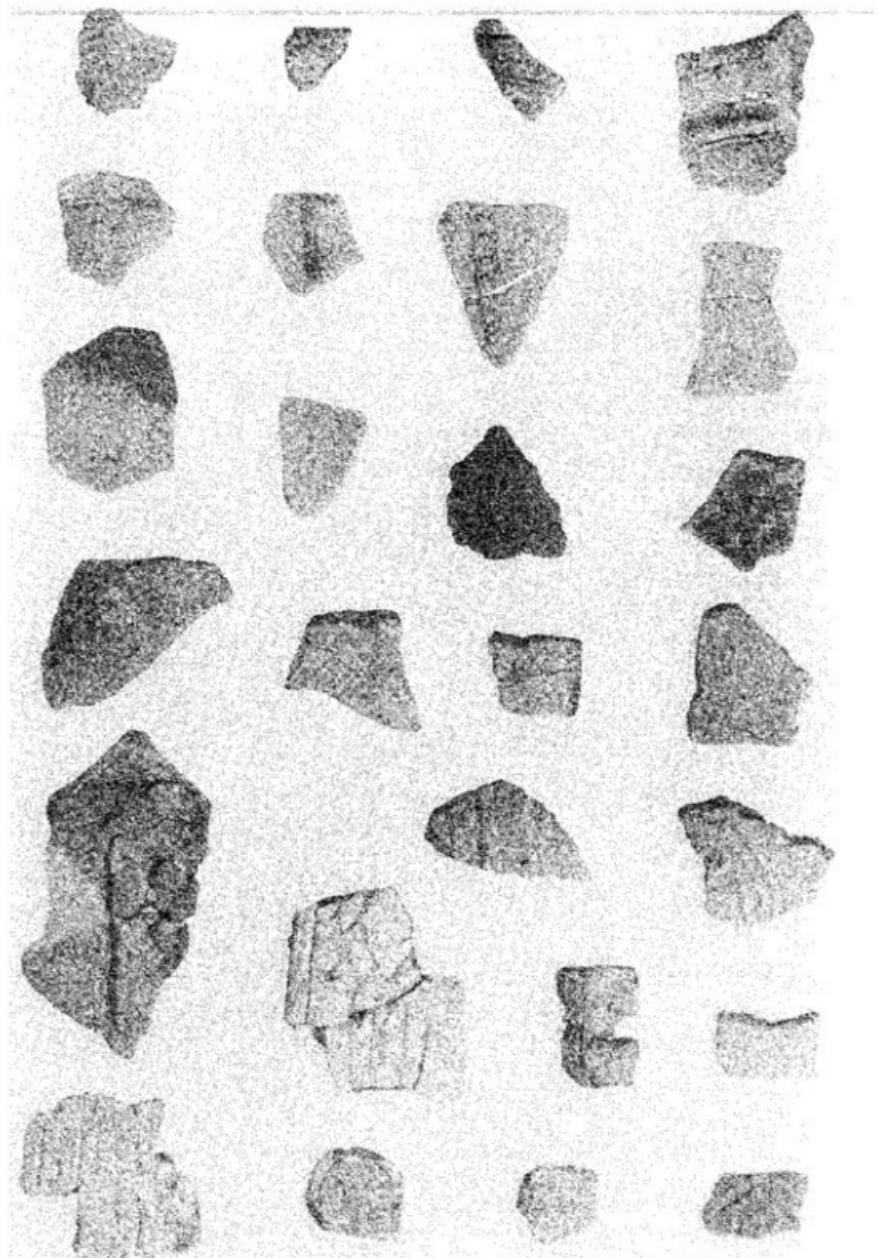
図版11 遺構内出土土器



図版12 遺構内出土土器

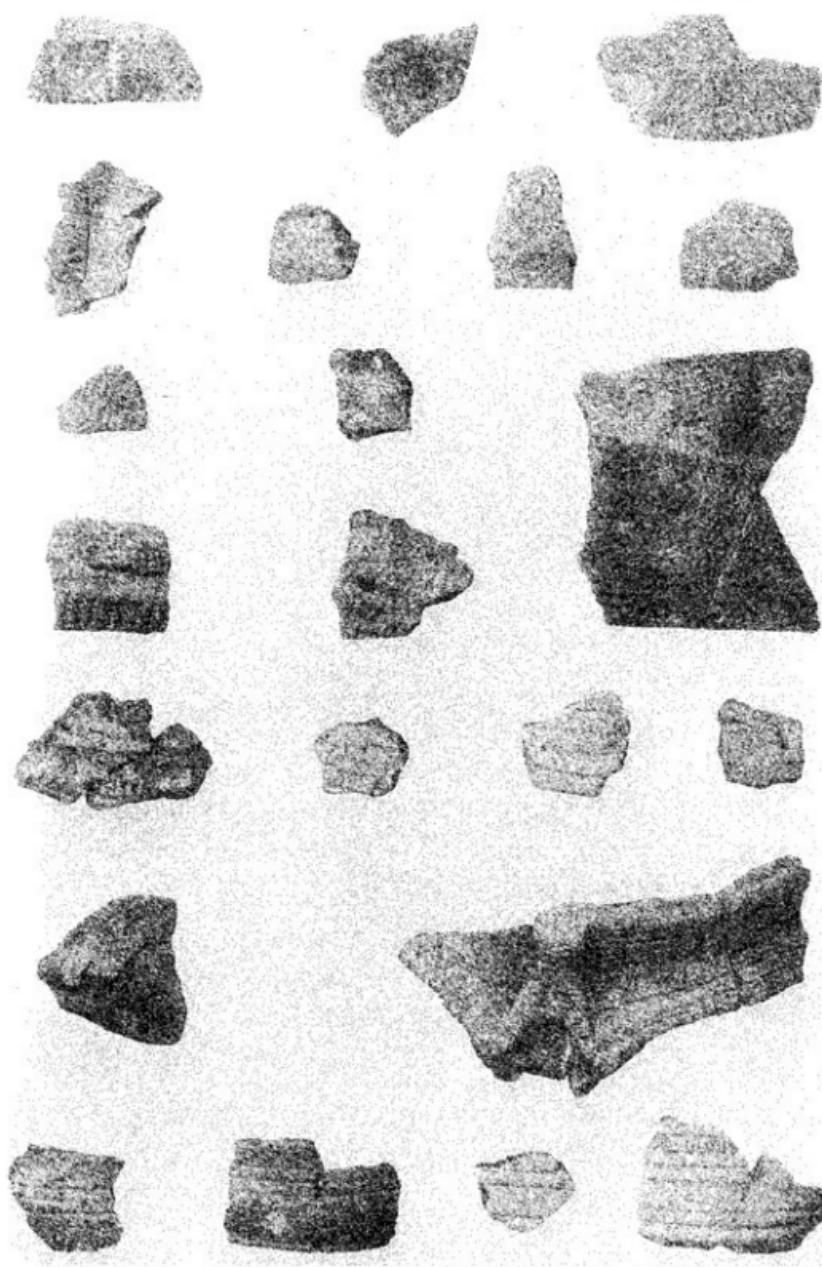


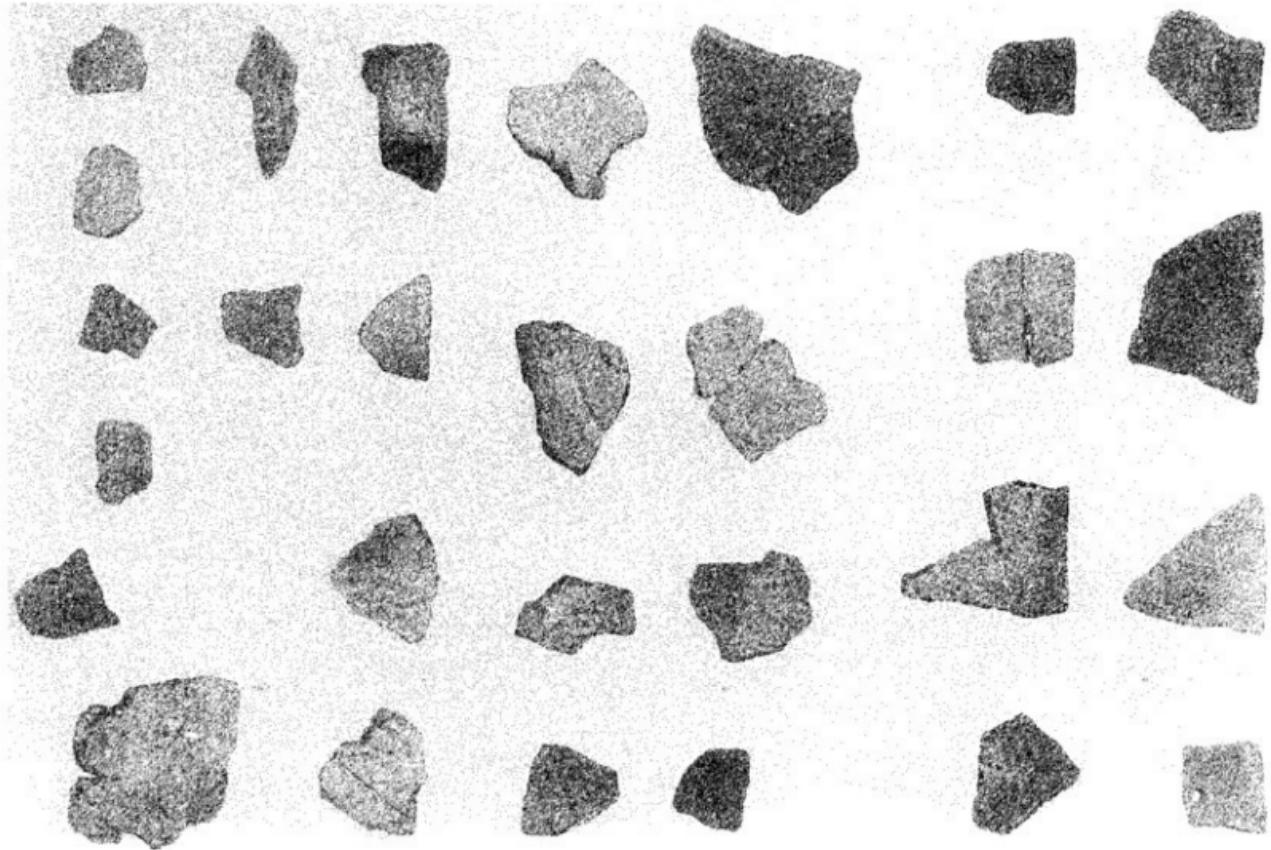
圖版13 遺燶內出土石器

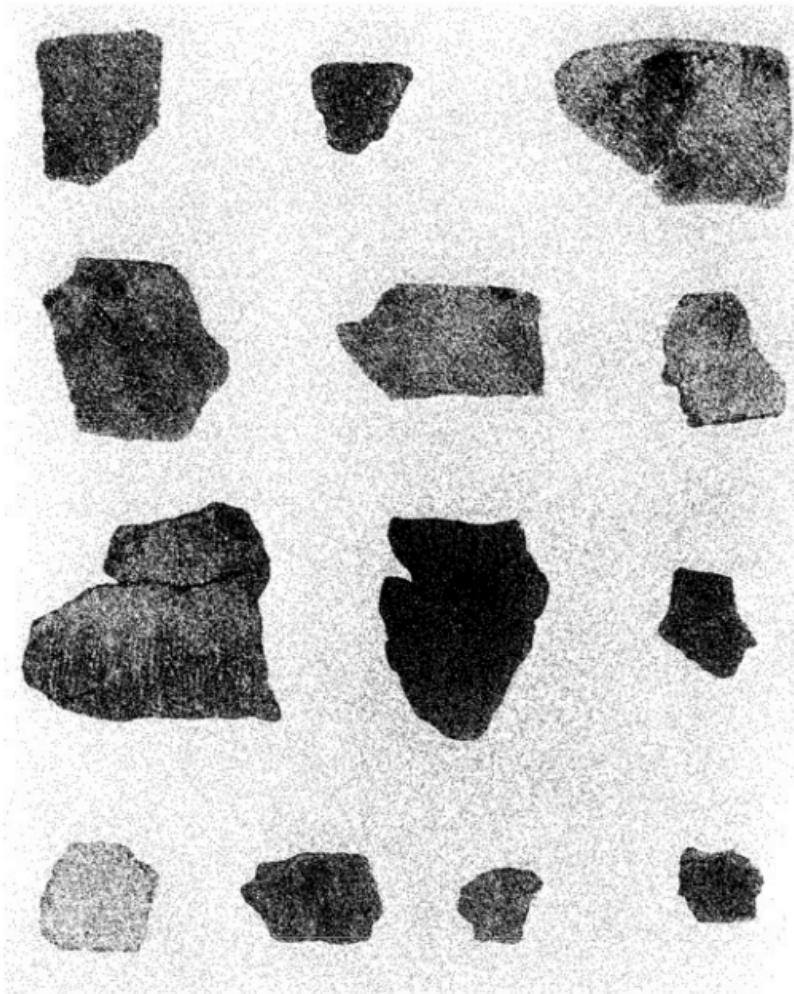


圖版14 遺構外出土土器

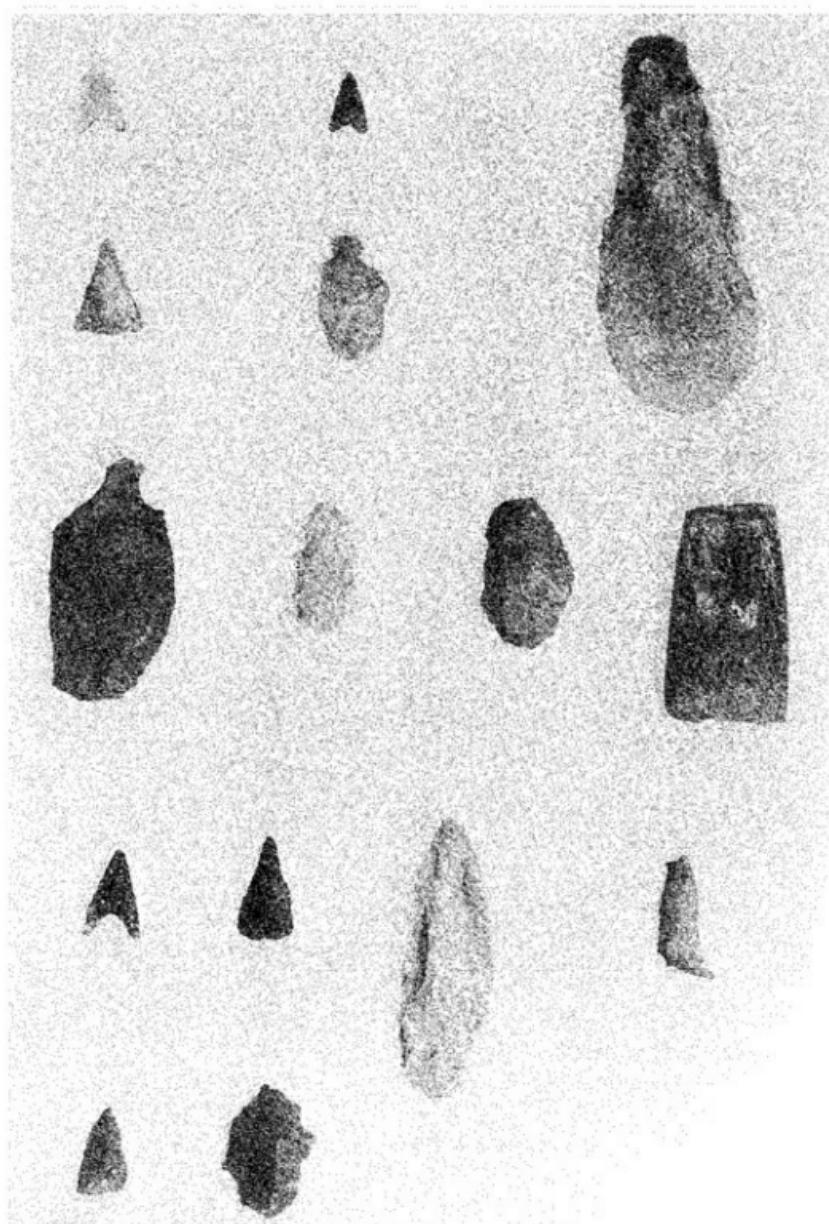
图版15 通模外出土土器



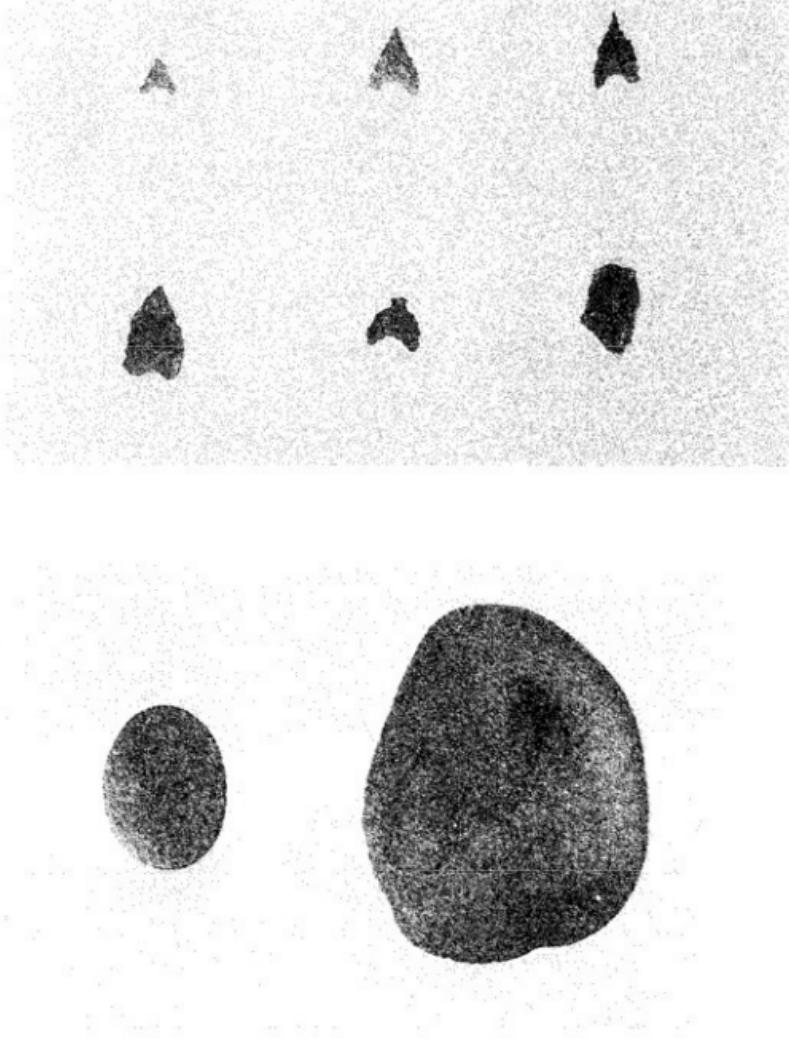




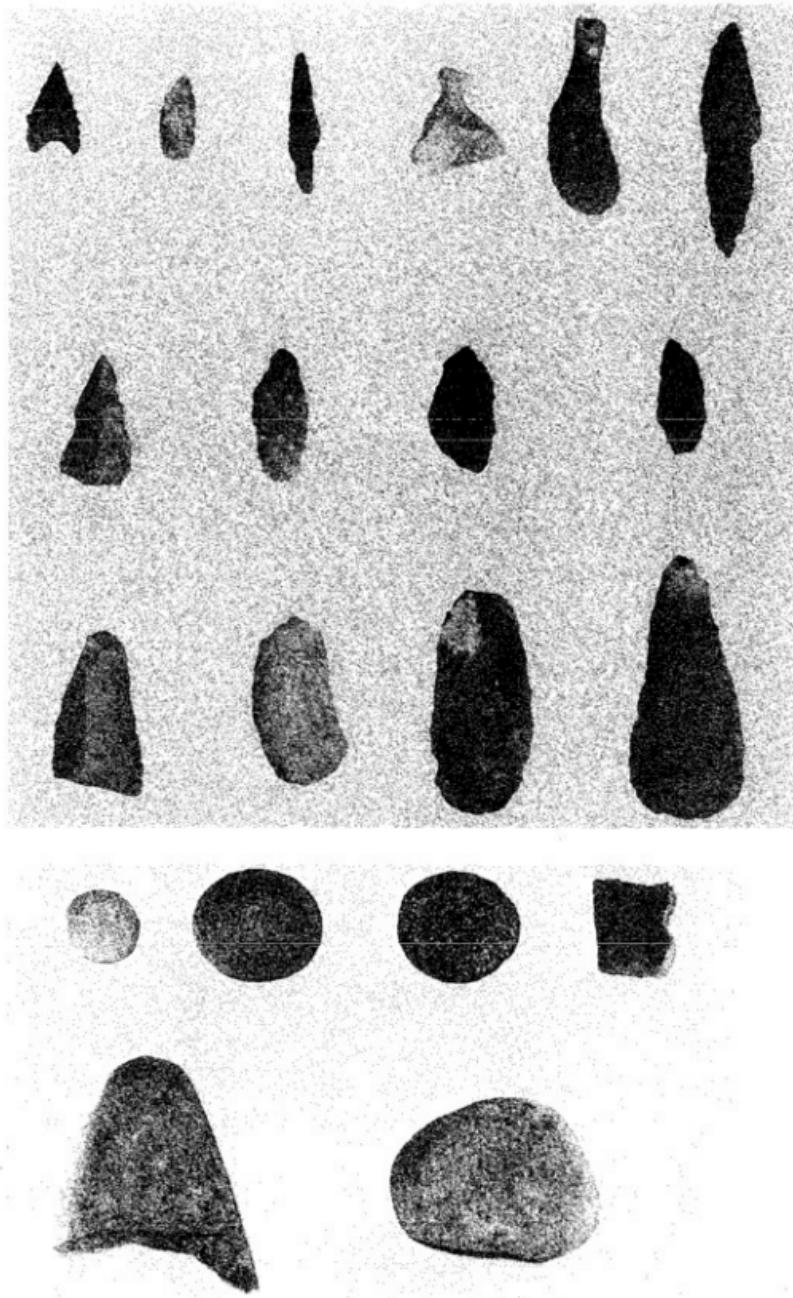
図版17 遺構外出土石器



圖版18 遺構內出土石器



圖版19 造構內出土石器



图版20 遗构外出土石器

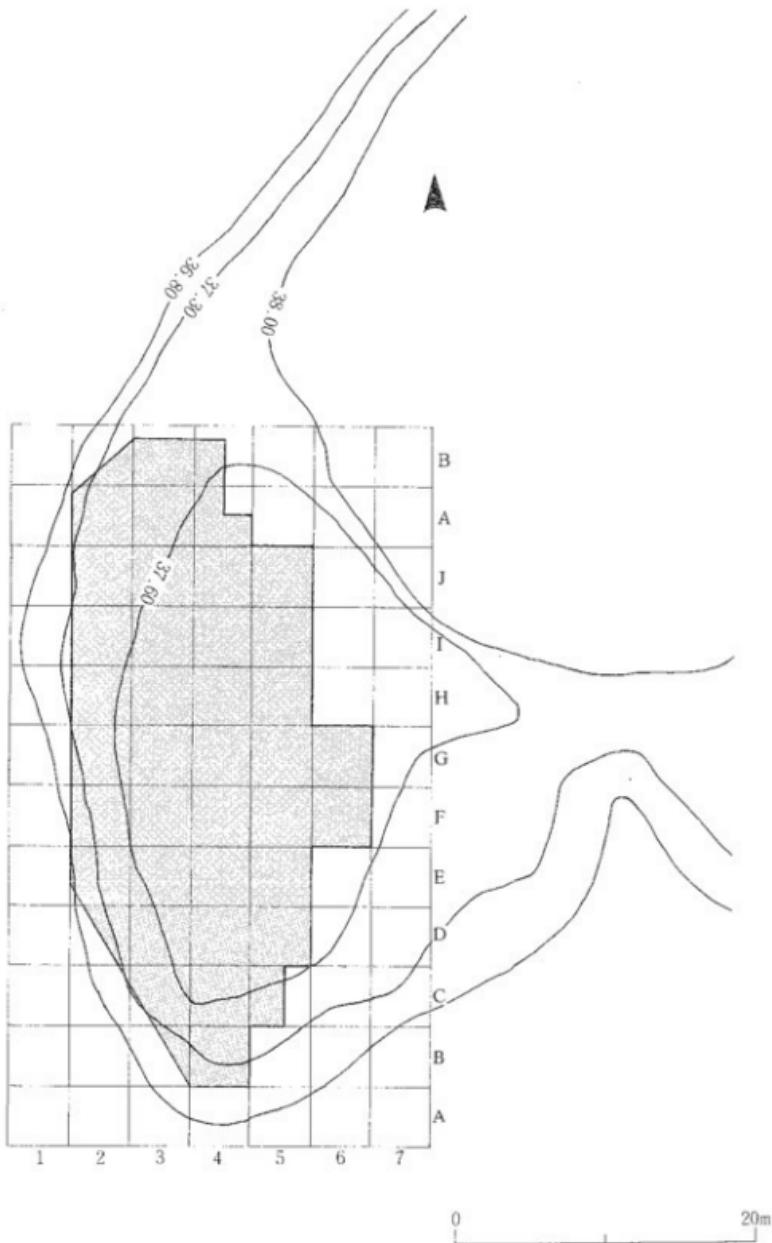
野畠遺跡

山口県

（一）

図1 線形測量の地形





第2図 グリッド配置図

遺跡の概観

野畠遺跡は、標高36m 程の南側に突き出す小さな舌状台地に位置する。南側は、末戸松本から深く沢（湯ノ沢）が入り込み、水田が営まれている。水田と遺跡との比高差は9mである。

調査は、先に実施した範囲確認調査の結果をもとに、特に遺物の集中する範囲にグリッドを設定して行った。基本層序は、第1層表土（黒色土）、第2層褐色土、第3層ロームであり、ローム層までの深さは平均して50cmである。調査の結果、縄文時代中期末葉の竪穴住居8軒、中期末葉～後期初頭の土爐4基を検出した。

遺構と遺物

1号住居跡（第3図）

調査地域のはば中央部に位置する。プランは、長軸3.5m 短軸3.2m の隅丸方形を呈する。一部は範囲確認調査のトレンチによって搅乱されているが埋土は大きく3層に分れ、黒褐色土、茶褐色土、黄褐色土が堆積している。壁は、西側がゆるく傾斜するが、他の壁は高さ20cmではば直立に立ちあがる良好なものである。周溝は認められない。ピットは、大小多数検出されているが東側の壁沿いに深さ20cm以上のしっかりしたものがあり、柱穴と思われる。炉は、住居跡の東側に作られた土器埋設石囲い炉である。20cmくらいの扁平な長い石を円形に並べて埋設土器を囲っている。周辺は焼土が多量にあり堅くしまっている。床面は、平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第11図5、17図11～13）

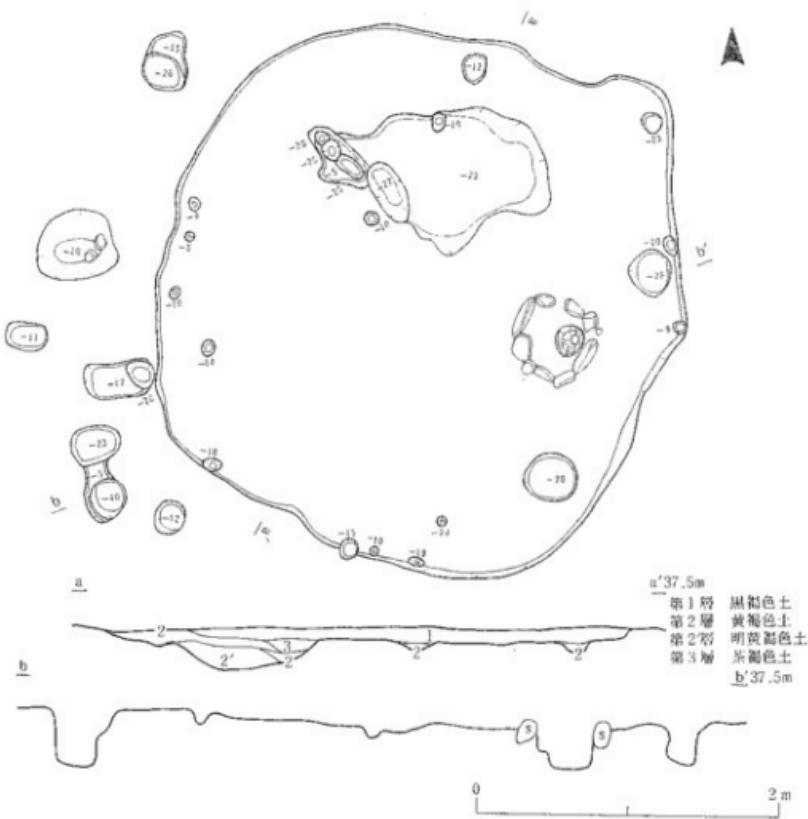
埋土から小破片が出土した。11・13は単節斜繩文、12は撚糸文である。炉埋設土器は胴部上半は欠損するが底部からゆるくふくらみながら胴部に至る深鉢である。地文の繩文はR Lの縱位回転である。二次加熱を受け全体にもろい。

石器（第18図1）

が付近のピット内から頁岩製の石鏃1点が出土した。

2号住居跡（第4図）

調査区の中央部に位置し、北東部に位置し、北東部は松の木根によって搅乱されている。また、北側は範囲確認調査時に東南から北西方向に入るトレンチにより床面まで剥離されている。プランは、西、南側はピットが検出された部分が丸く張り出しが基本的には、一辺3.2m～3.5m の隅丸方形を呈する。確認面から床までは10cmと浅いが、ほぼ直立に立ちあがる良好な壁が検出できた。埋土は、周囲から入り込んだ黄褐色土が主体で、さらに炭化物を含む黒褐色土、ブロック状に茶褐色土が堆積している。ピットは、壁際のコーナー、張り出し部に埋り込みのしっかりした深いものが6個あり主柱穴と思われる。炉は住居中央東側に作られた土器埋設炉である。床面は、良好で、特に焼土が認められ堅い。



第3図 1号住居跡

出土遺物

土器（第11図2、17図14～16）

埋土から出土した上器片と炉壺設土器がある。14～16は埋土出土で15は撚糸文、16は口縁部が無文帯で下部に磨消し手法によって文様が展開される上器片である。2は、炉壺設土器で口縁、底部は欠損している。地文のL R 縦位回転の縄文を施文後に沈線によって区画し、磨消し縄文手法を用いて文様帯を展開させている。

3号住居跡（第5図）

調査地域の中央部からやや南に位置し、東側は3号土塙が住居跡を切っている。プランは、長軸4.5m、短軸3.4mの北西に長い橢円形を呈する。壁の高さは12～18mでほぼ垂直に立ちあがり良好である。埋土は主に黒褐色土、褐色土、茶褐色土が堆積している。周溝は認められない。ピットは

径40~50cm、深さ60~70cmのしっかりした掘り込みをもつものが北西寄りに4個検出され主柱穴と思われる。炉は住居跡の中心部に作られている。土器埋設坑であり、南北に並んで埋設土器が2個体認められる。周辺には焼土が多量にあり、床は赤く焼け堅くなっている。床面は全体によくしもあり良好である。

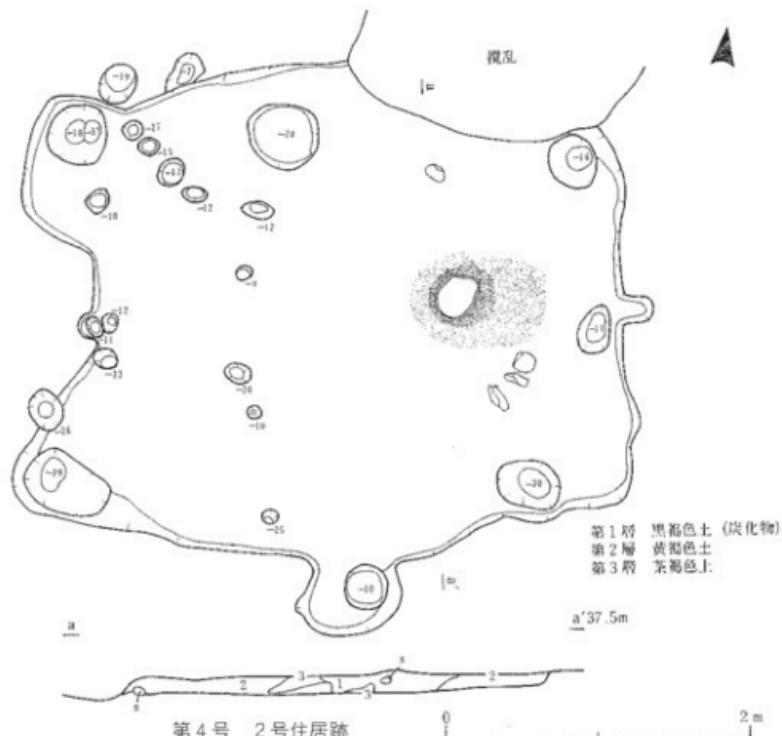
出土遺物

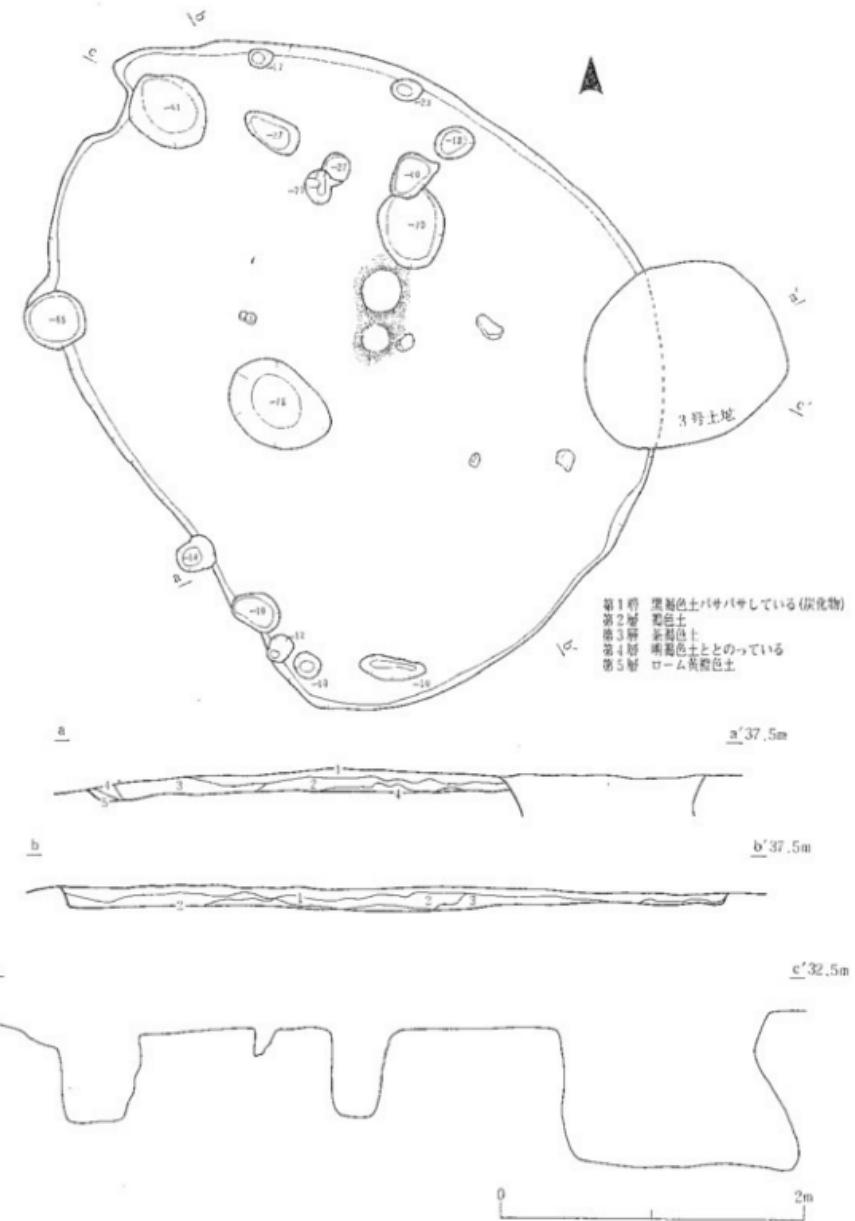
土器 (第11図3・4、17図17~20)

17~20は埋土から出土した土器片である。18以外は、沈線によって区画し、磨り消し手法を施すものである。3は炉北側、4は南側に位置する埋設土器である。3は胴上半部が欠損している。底部が小さく胴部がふくらむ深鉢である。地文の縦文はR Lの横位回転である。4は胴部以外は欠損する。地文の縦文はL Rの縦位回転である。3・4とも胎土、焼成は良好であるが3は二次加熱を受けて赤くなっている。

石器 (第18図2・3)

2は埋土出土のきれいに磨いた磨製石斧で、石質は緑色凝灰岩である。3は脚付きの石皿である。明瞭に縁を施し、凹面は扁平でよく磨かれている。





第5図 3号住居跡